

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

魔法少女の「」

【作者名】

戦艦大和

【あらすじ】

この世には、戦っている者達がいる。

その身を削り、恐怖に耐え、全力で戦っている者たちがいる。

なぜ、彼らは戦うことができるのだろうか？

なぜ、その身を削ってまで？

なぜ、恐怖に耐えてまで？

なぜ、そこまで全力で？

なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

……戦う彼らにとって、最も大切なものためである。

あなたには、それがわかりますか？

注意：この作品は以下の成分を含んでおります

- ・オリ主介人物
- ・中途半端に一部設定TYPE MOONより引用（一部単語に至ってはモロに引用）
- ・ご都合主義
- ・独自考察
- ・毎回まちまちな文章量
- ・不安定な更新間隔
- ・下手クソな文章
- ・読みにくい文章
- ・大量の誤字脱字
- ・語彙の少なさによる単語の誤用率高

以上の要素がお嫌いな方は戻るボタンを押すか、ブラウザかタブを閉じてください。

プロローグ「ただいま」

彼女と出会ったのは2006年の夏のことだった。

見滝原の近代都市化計画は始動に向けての議論が終了し、まさにこれから始まると言う段階であった頃。世間一般では夏休みに突入し、当時「8歳」だった私は主にその夏休みが原因で暇を持て余していた。何故暇を持て余していたか、と問われれば答えは一つしかなかった。当時の私には「友達」が一人もいなかったのだ。

別に私がコミュニケーション障害を負っていて、学校において周りとうまく行かなかった、と言う訳では無い。なぜなら当時の私はそこに住み始めたばかりだったからだ。学校も既に夏休みに突入しており、クラスの面々との対面は二学期を待つこととなっていた。

そんな私に話したり遊んだりする友達などいるはずもなく。では何をしていたかと言われれば、私の両親が引越すと共に開いた「と言う事になっている」喫茶店でだらだら過ごしていた、と言うほかなかった。

もちろんやりたくて一日中そんなことをしていた訳では無かったが、いかんせんやることがない。当時の私が「魔女」と呼ばれる怪異の存在に気づいていれば、また違っていたのかもしれないが今言った所で詮無いことである。

……いや、むしろ知らなくて良かったのかもしれない。でなければあの日、あの場所に私は居なかっただろうから……

ある晴れた日の真昼の事だった。

開店したばかりのこの店には食事時であるにも拘らず、あまり客は入っていないかった。閑散とした店内でこの店に入ってきた数少ない客を眺めていると、入口のドアにかけていた鈴が鳴った。

「いらっしやいませ。三名様でよろしいですか？」

私の「父」が新たに来た客にあいさつする。

大人の男女、それに一人の女の子。見覚えの無いであろうこの店に踏み込んだ新たな客は、子連れの親子のようだった。

「はい、そうです。」

「分かりました。では、「こちら」。」

そう言って、彼らを椅子が四つあるテーブル席に案内する。女の子は初めて来る店だからだろうか、あたりをしきりに見回していた。

「メニューはこちらとなります。決まったら手を挙げて呼び出してください。」

「あ、わかりました。」

「では、「ゆっくり。」

メニューを渡すと父は一旦引き返す。どつやらお冷とおしぼりを取りに行ったらしい。その間にその親子はメニューを覗き込み、貼つてある写真を見て「おいしそう」「などといった言葉をこぼしていた。

そしてそうこうしているうちに父がお盆におしぼりと三つのコップ、お冷の入ったピッチャーを載せて戻ってきた。

「こちら、おしぼりとお冷になります。」注文の方は何になさいますか？」

「あー、じゃあ……」

そうして注文が入れられていく。そんな風景を眺めていると、女の子から視線を向けられていることに気づいた。

別に視線を向けられるのはどうと言う事は無い。目立つ外見をしている事は十分自覚していたし、事実この店に初めて来た人はほぼ例外なくカウンター席でなにをするでもなく座っている私をもの珍しそうに見る物だった。

そして、その子の母親もその視線に気づいたらしい。

「あの子は、あなたの娘さんですか？」

「……………ん？ええ、そうですよ。ちよつと待ってくださいね。」

キツカちよつとこつちに来なさい。」

ちよつど注文されたメニューを書き留めたタイミングでそんな話を振られた父が私を呼ぶ。呼ばれた私は席を立ち、その親子の元へと向かった。

「キツカと言います。橘の花と書いてキツカ。」

ほらキツカ、この子にこつ挨拶なさい。」

「はい、お父さん。」

そう言って私を見ていた女の子へ挨拶を促す。私は父からその子へ向き直ると、

「こんにちは、秋水 キツカです。」

「あ……………えつと……………」

と言っつて、軽く頭を下げた。

よく見れば、その子は若干身長は低いが私と同じぐらいの年のようだ。引つ込み思案なんだろう、女の子はいきなりの事に少々戸惑っているようだった。

「ほら、せつかく挨拶してくれてるんだから、アンタも返さないかね？」

「じ……じ。」

女の子の母親もまた挨拶を促す。

そしてその子は数回呼吸を入れ、意を決したように口を開き。

「は、初めまして。鹿目 まどか……です。」

自らの名を、私に告げた。

随分と、懐かしい夢を見た気がする。

もう五年も前の記憶、それを私はどうやら夢に見ていたらしい。我ながら、こんなタイミングで彼女と出会った日の事を思い出すとは。文字通り夢にも思わなかった物だ。

そんな事を考えながら、上体を起こす。

随分と広い部屋だ、調度品なども必要最低限しかなく、それがまたこの部屋の広さを際立てているようだった。

そしてやけに赤い。

……いや、部屋が赤いのではない。どうやらこの部屋を照らす光源が赤いらしい。

窓の外を見ると真っ赤な丸い物体が浮いてた。この部屋は結構な高層階にあるらしく、そこそこの眺めだった。

そこまでの事を確認して今、何時なのか知りたくなった。広い部屋を少し見回す。すると目当ての物はすぐに見つかった。

壁掛け時計、年月日表示付き。少し遠いところにかけてある物に目を凝らす。

……どうやら、随分と寝坊してしまったらしい。

こりゃ「あいつら」にちょっと怒られるかな？

そんな事を思いながらため息をついた時

ドアが、突然開いた。

私がそちらを向く。

人数は六。全員女で歳は一人を除き皆私と同じぐらい。そして、その六人の先頭には

バカみたいな顔して固まっている「彼女」がいた。

なんて顔してるんだよ、と私は苦笑する。

……いや、むしろこれが当たり前の反応なのかもしれない。そこまで思い至って、あることに気づいた。

……ああ、そういえば。

まだ、言ってなかったな。

本当ならとっくに言ってしまったているべき一言。だが「寝坊した」
せいで未だ言う事が出来ていなかった。

でもまあ、今からでも遅くはないか。

きっと、彼女は許してくれるだろう。

やることを終え、帰ってきたのだ。ならば、言つべき言葉は一つだ。

そして私は彼女に笑いかけながら言った。

「ただいま」と。

第一話「夢の中で会った…よつな…」

風が気持ちい。

彼女がまず最初に感じたのは、体をなでる心地いい風だった。

冷たくもなく、暑くも無く。清涼感のある風が彼女の髪を、服を揺らす。

そのままふと目を開けてみると、幻想的な風景が広がっていた。

凹凸の無い平坦な大地に赤、白、黄の三色の花畑がどこまでも広がっていた。

空は吸い込まれそうなほど黒く、無数の星たちがさんさんと輝き、ひしめき合っている。

しかしこれらも幻想的ではあるのだが、この場において特筆すべきはそれでは無いだろう。

地上三メートルほどの場所に、光でできた紋章が浮いていた。

一つだけではない。高さ、幅共に1メートルほどの紋章が、大きな間隔を開けて無数に浮いている。しかもその紋章たちには、同じものは何一つなかった。

銃弾をあしらった二本の剣がクロスしている物。

一本の長い弓に、マシンガンを並べた物。

クロスした二本の大鎌に火の玉が付いている物。

一振りの刀を八本の刃で囲った物。

一つ一つデザインも、色も違う紋章達が世界を照らしていた。

風が吹き続く。

紋章の放つ光の中で、花々が揺れるのが見える。

そんな不思議な世界で彼女は何をしてもなく、一種のなつかしさと共にその光景を眺めていた。

しばらくすると、世界そのものが黒くフェードアウトしていった。地面も溶けるようになくなり、不思議な浮遊感が体を包み込む。そして

ピピピピピピピピピピ

「んんんん」

けたたましい電子音が、秋水 キツカを叩き起こした。

「うー、目覚まし時計のチョイス間違ったかな……」

朝、パジャマ姿のキツカが耳を押さえながらぼやく。

彼女は先日目覚まし時計が壊れたので新しい物を買ったのだが、どうやら彼女には少々音が大きすぎたらしい。

「みんなの毎日聞いてたら耳が馬鹿になりそう……」

音量の調節は出来ないのかな……」

部屋の真ん中に置いてある背の低い机を見る。炬燵から布団を取っ払ったその机の上には、焼いた食パンと目玉焼きが置いてあつ

た。

喫茶店を経営している彼女の両親は、キッカが起きた頃には既に店を開店して仕事を始めている。故にキッカの朝食は彼女が起きる前に作られ、用意されているのが常であった。

時計を見る。現在時刻、7時15分。

年月日、2011年11月25日金曜日。

「とりあえず、とっとと朝ごはんでも食つか。」

そう言いながら、部屋のカーテンを開け放った。

「いつてきますー!」

7時58分。

短いポニーテールをまとめて制服に着替え、朝食も食べ終わったキッカはいつもの待ち合わせ場所へ走る。

「何とか間に合つかない?」

本来なら徒歩五分ほどの所で8時集合なのだが、朝食の後に起こったアクシデントのせいで出発が若干遅れていた。数分なら待つてくれるだろうが、生憎彼女に人を待たせる趣味は無かった。

自宅から二分ほど走ったところで待ち合わせ場所が見えてきた。人影は二人。どうやらビリケツにはならず済んだようである。その人影の内一人が彼女に気づいて手を振った。

「キツカー。おはよー。」

「おはようございます、キツカーさん。」

「ハア……おはようさやか、仁美。」

「なんか、いつもより遅いけどどうかしたの？」

美樹 さやかと志筑 仁美。二人からのあいさつと、さやかの問いを受けたキツカーは一息ついてから返す。

「朝ごはん食べた後にスカートに牛乳こぼしちゃってねー

別のスカートも干してる所だったからアイロンかけて無理やり乾かしてた……」

「なるほど、それはドンマイ。」

「朝から災難でしたわね。」

と軽い間世話を始めると、誰かが走ってくる足音が聞こえてきた。そちらを振り向くと、鹿目 まどかこちらに手を振りながら走ってくる姿が見えた。

「おはよー。」

「おはようございます。」

「おはよう。」

「まどか遅ーい。……お？可愛いリボン。」

さやかがまどかのリボンを見てそう評す。昨日まで黄色だったまどかのリボンはピンク色にかわっていた。

「そ、そうかな？派手すぎない？」

「とても素敵ですわ。」

「なかなかかわいらしいチョイスだね。でもその様子だと選んだのは詢子さんかな？」

恥ずかしそうにしているまどかに、仁美、キツカがそれぞれ順に評す。

そしてキツカの指摘に一瞬まどかはきょとんとする。

「うん、そうだよ。でもなんでわかったの？」

「そりゃまどかは自分から派手な色は選ばないもんね。」

「あー、確かに。いっつも地味な色ばかり選ぶよね。」

「じ、地味……」

キツカ、さやか両名の指摘を受け若干へこむまどか。指摘が事実なだけに余計に来るものがあったようだ。そしてその様子を見た仁美は苦笑していた。

そんな会話をしながら一行は学校に向かって歩きはじめた。無論、その途中に会話が途切れる事は無い。

「……でね？ラブレターじゃなくて直に告白できるようでないダメだって。」

「相変わらずまどかのママはかっこいいなあ……美人だし、バリキャリだし。」

「そんな風にきっぱり割り切れたらいいんだけど……はあ。」

……そしてこの年代の女子は、やはりネタさえあれば恋愛の方に話が傾くのはもはや必然であった。そのラブレターをもらった本人は困ったように嘆息する。

「まあ、仁美はそんな性格だからね。でも断る時は手心加えちゃダメだぞ？」

「おお、モテる人のセリフですなあ。流石金髪碧眼のハーフなんてアニメから出て来たようなお人は違うー」

「うら、さやか〜。からかうなよもっ……」

さやかの頭にキツカが軽く小突く。

だが彼女も先の「金髪碧眼のハーフ」というキャラのせいか、仁美とタメを張るほどモテているのは事実であった。

「しっかし、うやましい悩みだねえ……」

「いいなあ。私も一通ぐらいもらってみたいなあ……ラブレター。」

まどかのうらやむセリフ。そしてイメチェンしたばかりの彼女の発言に反応したのはさやかだった。

「ほう？まどかも仁美やキツカみたいなのモテモテな美少女に変身したいと。そこでまずはリボンからイメチェンですか？」

「ちがうよ、だからこれはママが」

さやかの発言にまどかが言い返す。だが当の本人は全く聞いていない。

「さては、ママからモテる秘訣を教わったな？けしからーん！そんなハレンチな子は……っだ……」

「や、ちよっと、やめて、や、め……」

「可愛いやつめ！でも男子にモテようなんて許さんぞー！まどかは私の嫁になるのだ……」

そしてそのままじゃれあい始めてしまった。子犬のようにじゃれあう二人に流石のキツカもあきれてため息が出ていた。

そしてキツカは仁美と手をつなぐと

「え？あ、ちよっ……」

そのまま軽く走り出してしまった。

「ほら、じゃれあってないでとっとと行くよ。予鈴鳴っても知らないからね?」

「あ、キツカちゃん待って〜」

「こらキツカー!、私達を置いてくなー!」

抗議の言葉が聞こえてきたが、あえて無視することにした。

「今日はみなさんに大事なお話があります。心して聞くように。」

目玉焼きとは、固焼きですか?それとも半熟ですか?はい、中沢君
「!」

「えっ、えっと……ど、どっちでもいいんじゃないかと……」

朝っぱらからどっちでもいいような質問を飛ばしているこの人物は、非常に残念なことにこの学校の教師のひとりでありキツカの担任である先生だ。

キツカは中沢氏とはあまり話したことはなかったが、それなりに気の毒に思っただった。

「その通り……どっちでもよろしい!たかが卵の焼き加減なんかで、女の魅力が決まると思ったら大間違いです!

女子のみなさんは、くれぐれも半熟じゃなきゃ食べられないとか抜かす男とは交際しないように!」

そして、男子のみなさんは、絶対に卵の焼き加減にケチをつけるよ
うな大人にならないこと!」

どつやら、「二三か月付き合ってた彼氏と別れたようだ。HRの際にいつもノロケ倒していたが、その割には別れた原因は至極どうでもいいものだったらしい。少し離れたまどかとさやかの様子を見ると、こちらにも顔を見合わせあきれているようだった。

と、ひとしきりしゃべり終えた早乙女 和子先生は先ほどまでの憤慨した表情を消すと、笑みを浮かべて話題を転換した。

「はい、あとそれから、今日はみなさんに転校生を紹介します。」

先ほどの話題に、これ以上に優先すべき要素などあっただろうか？ それとも何も無いように見せかけからの転校生紹介と言っドッキリのつもりなのだろうか？

と、軽くどうでもいい思考が一瞬キツカの頭をよぎったが、教室のドアが開かれ、転校生本人が入ってきたことによりそんな思考は霧散した。

教室がざわめく。まあ、無理からぬことかもしれない。その女の子は同年と言っにはあまりにも大人びていた。

遠くから見ても丁寧に手入れされていることが伺える長い黒髪に、整った顔立ち。

その表情と、堂々とした足取りがその大人っぽさを強調しているようだった。

「はい、それじゃあ自己紹介いってみようー」

早乙女先生が明るく促す。が、転校生は対照的にひったくるようにペンをとると、ホワイトボードに自分の名前を書き始めた。

そして教室に向き直ると、

「曉美 ほむらです。よろしくお願いします。」

と、必要最小最低限の言葉で自己紹介を終えてしまった。

「ええ!?何それ？」

「わけわかんないよね……」

その日の放課後、学校近くの軽食店でまどか、さやか、仁美、キツカの四人がだべっていた。話題については、もちろん本日転校してきた転校生についてであった。

あのHRの後の休み時間。気分が悪くなったという転校生ことほむらが、保健委員であったまどかに連れられ保健室へ向かう途中、「家族や友達が大切か？」などとききなり妙な事を言われたらしい。

もつとも、初めてのクラスで何も分からないはずのほむらが保健委員が誰かを把握していたり、実質的にまどかが連れて行ったというように連れて行かれた形になっていたことも妙なのだが。

「文武両道で才色兼備かと思いきや、実はサイコな電波さん。くー！どこまでキャラ立てすりゃあ気が済むんだ？あの転校生は！萌えか？そこが萌えなのか？」

「キャラ立ってることは同意だけど、そのどこに萌える要素があるのよっ。」

さやかの訳の分からない発言にキツカが突っ込みを入れる。まどかもこの発言には微妙な笑いになっていた。

「まどかさん。本当に曉美さんとは初対面なの？」

仁美がまどかに尋ねる。

あの転校生はHR中、ずっとまどかを凝視していたのだ、その上に先の妙な言動である。まあ、そう思われても仕方がないかもしれない。

そしてその問いに対し、まどかは少しためらった様子を見せてから口を開いた。

「うん…常識的にはそうなんだけど……」

「何それ？ 非常識なところで心当たりがある？」

まどかの意味深な発言にさやかが食いつく。当のまどかはかなり言いにくそうだったが答える。

「あのね…昨夜あの子と夢の中で会った……ような……」

沈黙。きょとんとした顔でさやかが目を開く。だが次の瞬間には堰を切ったように笑い始めた。

「あはははー！ すげー、まどかまでキャラが立ち始めたよー！」

「ひどいよ。私真面目に悩んでるのに……」

「あー、もう決まりだ。それ前世の因果だわ。あんた達、時空を超えて巡り合った運命の仲間なんだわぁー！」

まどかがさやかに抗議するも、笑いやむ事は無い。

と、ここで先ほどまで何か考えていたような様子だった仁美が口を開く。

「夢って、どんな夢でしたの？」

「それが、何だかよく思い出せないんだけど……とにかく変な夢だった」

たっただけで……」

それがどうかしたの？と言わんばかりの顔をするが、仁美は続ける。

「もしかしたら、本当は暁美さんと会ったことがあるのかもしれないわ。」

「え？」

「まどかさん自身は覚えていないつもりでも、深層心理には彼女の印象が残っていて、それが夢に出てきたのかもしれない。」

と仁美は自らの推論を話す。が、さやかもまどかもいまいち納得はしていないようだ。

キツカもちろん納得していない。だが彼女が納得していない根拠は彼女たちとは似ているようで違っていた。

何故納得していないか、と言えばまどか達にとってもそうだがほむらの事を知らないというのもある。

が、キツカにとっては何より彼女の「目」が決め手だった。

強い、執着の念。しかもこの年代の女子が抱く物にしては、およそまともでないような代物。過去にあそこまでの感情を抱くような「何か」があったというなら、まどか自身が覚えてないと逆におかしいのだ。

そもそも、キツカにとってはほむら自身におかしく感じる所が多すぎた。

例えば、運動。

朝のHRで早乙女先生はほむらに気おされかなり小さくなっていたが、確か最後にこう言っていたはずだ。

「暁美ほむらは最近までずっと入院していた。」と。

だが今日の体育の結果はどうだろう？ほむらはどんな競技でもそ

つなくこなし、先生の話が正しければ高跳びの県内記録までたたき出していたではないか。

とてもではないが、最近まで入院していた人間に出来る芸当ではない。

例えば、移動。

滝見原中学校は、中学校としてはかなり大きい部類にあるものだ。当然のごとく、初めての人間はすぐ迷う。

今日、何度か移動教室があったが、その間の移動をほむらは「全く迷うことなく」やってのけた。

学校の見取り図を記憶していた可能性も考えられるが、それにしたって彼女の歩みは「迷い」がなさすぎた。

まるでこれまで「何度もやっていたこと」「のよつに……

「キッカー？ 帰るよー。いい加減にないと置いてっちゃうぞ？」

と、そこまで考えてさやか呼びかけで復帰した。他の三人は皆立ち上がっている、これから帰るようだ。

「ん？ あ、ああごめんごめん。ちよつと考え事してた。」

「たまにキッカちゃんってぼーつとしてることあるよね。」

「いつもしっかりしてるのにねえ……」

「四六時中気を張り詰めてても疲れるでしょ？ つまりはそついう事。」

キッカも立ち上がりながら軽くごまかす。どうやらうまくいったようだった。

「じゃあ、帰ろうか。」

「そだね。」

「あ、キッカ。まどかも行くんだけど今日CD屋寄っていかない？」

「ん？ もしかして上条君に？」

「まあね。」

へへ、と照れ臭そうに笑う。どうやら入院している幼馴染と聞くC
Dを買いに行くらしい。

さてどうするか、とキツカは思案する。いつもならここで彼女につ
いていくのだが、生憎今日の彼女には調べなければならないことが有
る。

別に今すぐ調べなければならぬと言いつ訳では無かったが、少し悩
んでから答える。

「じゅめん、ちょっと今日うちの方で用事があったさ……」

「うちって、キツカの家のお茶店の事？」

「うん、じゅめんね。」

「いいよいよ、喫茶店経営するのは大変だもんね。」

気にしないでいいとさやかが言う。納得した様子である。

「じゃあ私は……」

「うん、じゃあねキツカ。」

「またね、キツカちゃん。」

店を出てしばらくしたところで仁美と別れた後、キツカもまどかた
ちと別れる。そしてまどかたちを見送った後、キツカも自宅に向かっ
て歩きます。

「ちゅ、とつとつと支度しますか。」

走る、走る、走る。

その白い生き物は暗い建物の中を走っていた。

ここは見滝原にあるショッピングモール。その中の改装中のフロアである。

追われている白い生き物は、その名を「インキュベーター」と言った。

そして、一度限りの奇跡と引き換えに、「魔法少女」と呼ばれる存在を生み出す使命を負っている彼を追いかけるのは、皮肉にも彼らと契約し「魔法少女」となった存在そのものだった。

名を曉美ほむらといった彼女は、明らかな「殺意」を持って彼に迫る。だが彼女は未だインキュベーターに軽い手傷を負わせたのみで、フロア改装用の機材とその小柄な体を利用した逃走術によってなかなかとどめを刺す事が出来ていなかった。

しばらくインキュベーターが見えては攻撃するという事を続けてきたが、しまいには見逃してしまった。だがそれでもこのフロアの中にある事を確信していた彼女は最後にインキュベーターが向かった方向へ走る。

するとすぐ彼は見つかった。…出来れば、最も共に居て欲しくない人物と共に。

「ほむらちゃん……？」

「そいつから離れて。」

ほむらが冷たく言い放つ。だがまどかは彼を抱いたまま譲らない。

「だ、だって、この子、怪我してる……ダ、ダメだよ、ひどいことしないでー。」

「あなたには関係無い。」

そう、あなたには関係ない。関係を持つちゃいけない。

関係を持ったが最後、あなたを待つのは破滅だけ。そんなことは絶対にさせない。

しかしそんなほむらの思いは届かない。

「だってこの子、私を呼んでた。聞こえたんだもん！助けてって！」
「そう。」

まどかが彼を渡そうとしないなら無理やり奪い去るだけである。
ほむらがまどかに近づくと。

が、次の瞬間ほむらの視界が真っ白に染まった。

「まどか、いつちー」

「さやかちゃんー」

どうやら状況を見た美樹さやかが置いてあった消火器の消火剤をばら撒いたようだった。煙が収まったところには既に二人の姿は無い。
すぐに追おうとするが、今度は辺りの景色がゆがみ出した。

「いんな時」………

「魔女」。そう呼ばれる怪異が周囲を覆う。

彼女らの作る「結界」は一種のダンジョンとなっている。今すぐ急行したいのはやまやまだったが、難しいだろう。

しかし結界と言うのは何の力もない一般人が生きていけるような場所ではない。可及的速やかに助けに向かわねばならない。

そのために駆け出そうとしたときだった。

妙な感じが、ほむらの体を走り抜けた。

「え………」

これまで感じたことも無いような感覚に驚くほむら。だがその足が止まる事は無い。

今の感覚は、何だったのか？走りながら考える。

今の感覚は、明らかに魔力によるものだった。だが彼女の知る限りこんな妙な魔力を発する魔女は存在しない。

魔法少女もまた否である。この街に存在する現状唯一のほむら以外の魔法少女もこんな魔力を発したことは無かった。

では誰が……

と、ここまで考えたところで再び周囲の風景がゆがみだす。どうやら魔女は逃げて行ったらしい。

ほむらはまだ魔女に対し攻撃行為を一度も行っていない。と言う事は、必然的にここにはそれを撃退した魔法少女がここにいる事になるという事である。

つまり……

「魔女は逃げたわ。仕留めたいならすぐに追いかきなさい……今回、あなたに譲ってあげる。」

バマミ。彼女がいるという事だ。

まどかたちもいる、どうやら結果がとけた際、ほむらが近くに出現してしまっただようだ。

「私があるのは……」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげると言ってるの。お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

明確な敵意。彼女にとってはほむらは縄張りにいきなり現れ、「親友」を痛めつけた存在だ。警戒するのも無理からぬことだろう。

……既にインキュベーターと接触してしまった上に、バマミとも接触してしまった。ここでインキュベーターをどうにかしても無意味だろう。なら彼女とここで事を構えるのは無意味だ。そう判断したほむらは渋々引き下がる。

……インキュベーターとの接触は避けられなかった。だがまだ希望はある。まだまどかは契約していない。まだ救うチャンスがある限り、絶対にあきらめない。

が、彼女はあきらめない。鹿目まどかが助かる確率が僅かでもあるなら、彼女は絶対にあきらめない。

そのための次の一手を考えながら、撤回するのだった。

一方、同じ頃。

シヨップینگモール近くのビルの屋上に一つの人影があった。

皮の靴に薄いカーキのスボンと、皮のベルト。上は白っぽいパステルイエローのシャツに、同色で少し濃いめのベストと白い手袋。首には中世貴族がつけてそうな、いわゆる「ヒラヒラ」事クラバットに、それを留めているように付いているイエローの宝石。それらの上に真っ黒なロングコートを羽織っている人物。

ここまで書くと男性のコスプレのようにも思えるが、これを着ているのは生憎女性である。

『シグナル』が来たけど、この様子だと大丈夫みただね。」

ふう、とその人物は安堵した様子でため息をつく。

「しかしやっこさん追いかけてると、まさかこのショッピングモールに来ることになるとはねー…その上魔女まで現れるとは。こりゃ最初から行ってた方が良かったかな？」

そう言いながら頭をかく。だがそのような事を言っても「やっこさん」はここに来るとは限ら無かったし、何より魔女がここに現れるなど考えもしなかったことだ。最初からこの事態を予見でもしていない限りはとてでもないがそのような行動は出来なかっただろう。

「まーでも、やっこさん。怪しいと思ってたらやっぱり『魔法少女』とやらだったか。後つけて正解だったかな？しかし…まー何ともファンシーな恰好なことだ。魔法少女ってのはみんなそんな物なのかな？」

自身も相当常識はずれな恰好をしていることを棚に上げての発言。不要なコスプレをしているくせに、よく言えたものである。

「一応、目的は達成したわけだし。…今日の所は一時退散しますか。」

そう言って、身を翻し走り出すとビルの上から躊躇なく跳ぶ。

そして少し背の低いビルに着地すると、今度は少し高いビルの上に乗る。そんな感じにビルの上を梯子しながら、彼女は去っていくのだった。

第二話「それはとっても嬉しいなって」

私はバマミ

あなたたちと同じ、見滝原中の3年生

そして

キュウベえと契約した、魔法少女よ。

「……はっ!」

目覚まし時計の電子音。朝の到来を告げる音に鹿目まどかは目を覚ます。

まどかを起こすという役目を終えた時計のアラームのスイッチは切られ、まどかもそのまま体を起こした。

「はぁ……また変な夢……」

まどかが「変」とする夢を見るのは、昨日に引き続き二回目だった。どこが具体的に変かと言うと、昨日の夢もそうだったが、妙にリアリティのある夢だった事だ。まるで自分が体験したことをリプレイしているかのような、そんな感覚に陥ってしまいそんな夢。

だがそんな事はありません。魔法少女「なんて物も、あんな化け物も、常識的に考えれば存在しない。きっと、その手の妄想でもしたせいでこんな夢を見る事になったんだろう。…そう「常識的に」考えるならば。

だが、

「おはよう、まどか。」

昨日までは無かった、彼女への呼びかけ。声の方を見ると、白い猫ともウサギともつかぬ生物が鎮座していた。

そう。

既に彼女の世界には、紛れもない非常識が入り込んでいるのであった。

朝食を食べ終え、いつもの時間に、いつもの待ち合わせ場所へ走る。何もかもいつもどりの光景だったが、一つだけ違うところがある。まどかの肩。その上に、今朝の白い生物が引っかかっていた。

まどかはそのまま背中のが見えてきた二人の友人に声をかける。

「おっはよう。」

「おはようございます。」

「おはよう………っえっ!?!」

仁美とさやかがこちらを振り向く。だがさやかはこちらを向くならぎょっとした顔付きになって固まってしまった。

「おはよう、さやか。」

「え？あ、が………?」

固まってしまった元凶がさやかに声をかける。しかし、当の本人は
どう反応すればいいか分からないようだった。

「どうかしましたか？さやかさん。」

さやかの様子に気づいた仁美が声をかける。が、さやかはそれを無
視し、そのまままどかに近づいて耳打ちする。

「ホントにそいつ、私達にしか見えないんだ……」

「そうみたい。」

「あの……」

軽く無視され、状況が分からず戸惑っている様子の仁美。それに気
づいたさやかがあわてて繕う。

「あ、ああ、いや、何でもないからーいこーいこー」

そう言っさやかは仁美を連れて歩き出す。が、

（頭で考えるだけで、会話とかできるみたいだよ？）

唐突に頭の中に響く声に驚いたさやかは、立ち止まってまどかに振
り向いてしまうのだった。

（ええ!? 私達、もう既にそんなマジカルな力が？）

（いやいや、今はまだ僕が間で中継しているだけ。でも内緒話には便
利でしょ？）

（何か変な感じ……）

突然使えるようになった非常識な現象にさやかは戸惑う。そして

傍から見れば突然目を合わせたまま見つめあっているという異常な状態を見て仁美が口を開く。

「お二人とも、さっきからどうしたんです？しきりに目配せしてますけど……」

「え？いや、これは、あの、その……」

まどかがごまかそうとするが、仁美は聞いていない。

「まさか二人とも、既に目と目でわかり合う間柄ですか？まあ！たった一日でそこまで急接近だなんて。昨日はあの後、一体何が……」

「う……いや、そりゃねーわ。さすがに……」

「確かにいろいろ、あつただけじゃ……」

鞆を取り落しながらそうのたまう仁美に、まどかとさやかは若干引く。だが仁美は無視して続ける。

「でもいけませんわ、お二方。女の子同士で。それは禁断の、恋の形ですのよー！」

と、そのまま謎の思考暴走しながら走り去ってしまった。元々天然な所があるとは思っていたまどかだったが、流石のこれには微妙な顔を隠せなかった。

「バッグ忘れてるよー！」

「ああ……今日の仁美ちゃん、何だかさやかちゃんみたいだよ……」

「どーゆー意味だよ、それは……」

まどかの言葉にさやかが抗議する。と、ここでまどかが思い出したように言った。

「そういえば、キツカちゃんは？」

「ああ、キツカなら朝メールが来たよ。風邪だったさ。」

「キツカ？誰の事だい？」

キユウベえが訊く。どうやら彼女らの友人であるキツカの事を知らないようだ。

「キツカちゃんっていう私たちの友達。小学校三年の時から友達なんだ。」

「そうそう、金髪碧眼でハーフの美人さん。確か三年の夏休み中に引越してきたんだっけ？」

仁美の鞆を持って学校への道を歩きながらさやかは話す。まどかが相槌を打ちながら続ける。

「うん。でね？キツカちゃんのウチ、喫茶店やってるんだ。とってもおしゃれでキレイなお店なんだよ。」

「確か私や仁美より先に、まどかは引越すすぐのところに会ってたんだよね、その店で。いやー。転校初日にまどかの方から声かけるんだから、あの時はホント驚いたわ。」

当時、まどかは結構な引越込み思案だったのだが。それが「金髪碧眼」の「転校初日の転校生」に「まどかから」声をかけたのだ。当時の仁美とさやかの驚きたるや、天地がひっくり返るようだったという。

「また後でメール送ってあげないとね。」

「そうだね。……そういえば、さ。」

「と、さやかもふと思いついたように言い出す。

「キユウベえ。昨日の、アレ、……仁美はどうだった？」
「一応、軽く見てはみたけど。どうやら彼女にもかかっているみたいだね。」

キユウベえがさやかの問いに答える。

「！……そうなんだ。」

「まあ、実害は今の所ないみたいだし、今すぐどうにかしないといけない訳でもないんだから、そう急ぐこととは無いんじゃないかな？」
「そうなんだけど……。」

昨日、彼女らの先輩に当たる巴マミの家に行った際に判明した事象。もしかしたらとは思っていたが、やはり知らない間に何かあったと言うのは少々不気味な物があったらしい。少しさやかの顔が陰る。それに対してまどかが繕うように明るく言った。

「そ、それより早く学校行くこと？予鈴なっちゃうよ。」

「……そうだね。とりあえず仁美、追いかける？」

さやかからの提案に、まどかは笑ってうなずく。

「おーし、じゃあ走るぞー。学校まで競争だ〜。」

「ひゅー……」

そう言って二人は学校に向かって駆け出すのであった。

ショッピングモールの改装中のフロア。そこで起こった訳のわか

らない現象を解決してくれたらしい見滝原中の先輩、巴マミの提案でまどかとさやかはマミの住むマンションの一室に足を踏み入れている。そして、そこで話されたことは、これまでの彼女らの常識から見るかに外れた物だった。

ソウルジェム、何でもかなうと言う契約、キュウベえ、魔女、結界、呪い……………そして、魔法少女。

まどかたちの前に展開されたそれらは、あまりにも彼女らの知る常識から外れていた。が、彼女らも既に「非常識」を体験していた身である。それらの話を信じるほか、自らに起こった「非常識」を納得させる術は無かった。

最も、話がここまでならば、そういう世界もあるんだ、すごいなあ。」で済んだのだろうが、まだ話は終わらない。何と、まどかたちもこの超常なる世界に参加する権利を持っているというのだ。当然、踏み込むか否かの選択を強いられる訳なのだが…

「……………キュウベえに選ばれたあなたたちには、どんな願いでも叶えられるチャンスがある。でもそれは、死と隣り合わせなの。」

「ふえ……………」

「んー、悩むなあ……………」

今日、そのような非常識を知ったばかりの彼女らには、とてもではないがすぐに決めるなどと言う事は出来なかった。それも命がけの事と言うなら尚更である。

そんな彼女らにマミは一つの提案をする。

「そこで提案なんだけど……………二人ともしばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」

「「ええ!?!」」

突然の提案に驚く二人にマミは続ける。

「魔女との戦いがどういうものか、その目で確かめてみればいいわ。そのうえで、危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの。」

「……………うーん。」

「どうしようか?」

まどかとさやかは迷う。興味はある。幼い頃、誰もが一度は憧れた非日常の世界が目の前にあるのだ。至極当然の事だろう。だが同時に恐怖もあった。命がけなのだと言われれば当然である。…最もその恐怖は、心霊スポットに行く時の「怖いもの見たさ」のような程度の物でしかないのではあるのだが。

と、二人が迷った様子を見せていると、何か思い出したかのようにキユウベえが口を開いた。

「そういえばマミ。二人の体を調べなくていいのかい?」

「え?」

「どういふんですか?」

突然の事に二人は驚く。言われたマミ自身も失念していたらしく、少し驚いた様子を見せると「ああ、そういえば。」と小さくつぶやいてから二人に向き直る。

「ごめんなさい、すっかり忘れていたわ。さっきのショッピングモールの時に、ちよっとね……………」

「な、何かあったんですか?」

どうやら自分たちが何かされたらしい事を読み取った二人が説明を求める。

「さっき魔女に襲われた時に気づいたんだけど。君たちの体から魔力が感じられたんだ。魔法少女じゃない君たちから魔力が感じられるという事は、何かの魔法をかけられている可能性がある。」

キュウベエの言葉に二人は目を丸くする。するとさやかが恐る恐る尋ねて来た。

「な…何かって。もしかしてさっきの魔女の…？」

「いや、それは無いね。もし魔女の呪いにかかっているんだとしたら、君たち今頃お茶会どころの騒ぎじゃ無かったと思うよ。」

キュウベエからの否定の言葉に少し安堵したようだ。するとマミが先ほど机の上に出したソウルジェムをとって立ち上がる。

「一応、危険性は無いとは思っけど。調べておくに越した事は無いと思って。とりあえず鹿目さんからそこに立ってくれないかしら。」

「は、はっ。」

と、まどかを立ち上がらせると。マミはそのまままどかに近づき、ソウルジェムをまどかの体に掲げる。するとソウルジェムが反応して淡い光を放ち始めた。

「うーん……なにか魔法をかけられてるのは確かなんだけど……どうい魔法がかけられてるのは分からないわね……一応害はなさそうだけど……」

「一応魔女特有の邪気は感じられないし。もしかしたら魔法少女による物かもね。」

マミのコメントに対し可能性の一つを提示するキュウベエ。この一言を聞いたさやかがふと思いついたように口を開いた。

「あの転校生も、えっとその……魔法少女なの？ マミさんと同じ……」
「そうね。間違いないわ。かなり強い力を持つてるみたい。」

さやかの問題に対してマミは肯定で返す。

「でもそれなら、魔女をやっつける正義の味方なんだよね？ それがないで、急にまどかを襲ったりしたわけ？」

「彼女が狙ってたのは僕だよ。新しい魔法少女が産まれることを、阻止しようとしてたんだろっね。」

「え？」

続けざまに放たれたさやかの問いに答えを返したのはキュウベエだった。しかしその回答はさやかに更なる疑問を抱かせる。

「何で？ 同じ敵と戦っているなら、仲間が多い方がいいんじゃないの？」

「それが、そうでもないの。むしろ競争になることの方が多いのよね……」

「そんな……どうして……」

さやかの言うとおり、共通の敵を倒すなら協力して倒した方がいいではないか。というまどかの疑問にもマミは答える。

「魔女を倒せば、それなりの見返りがあるの。だから、時と場合によっては手柄の取り合いになって、ぶつかるところもあるのよね……」

見返り、報酬。いくら奇跡と引き換えに戦えと言われたところで、無報酬で魔女と戦おうなどと言う者はほとんどいないだろう。恐らくそれが無ければ魔法少女の多くは奇跡と結果を受け取ると、そのまま逃げ出してしまう事は目に見えている。

「つまりアイツは、キュウベえがまどかに声掛けるって最初から目星を付けてて、それで朝からあんなに絡んできたってわけ？」

「たぶん、そういうことじゃしょね……」

さやかの推論を肯定する。彼女らにとっては残念なことに、それが魔法少女における「常識」であった。

「次は、美樹さんね……とは言っても、多分かけられてる魔法は一緒だと思っけど。」

「あ、はい分かりました。」

さやかが立ち上がると、まどかにしたのと同じようにソウルジェムを掲げる。するとやはりこれもまたまどかの時と同じ反応が起こるのだった。

「どつやら美樹さんにもかかってるみたいね。」

「マジですか……」

「まあ、さっきも言ったけど。邪気は感じられないし。今の所実害も無いみたいだから放っておいて大丈夫なんじゃないかな。恐らくかけなおさなければ自然消滅するだろうしね。」

そうキュウベえは言うが、たとえ無害だとしても、だれか分からない人間に何かされているというのは、無条件に無気味であった。

「あなたたちの周りの人にも同じ魔法がかけられてる可能性もあるわ。一応キュウベえに見てもらいましよう。」

「え？キュウベえに見てもらっつて。大丈夫なんですか？」

マミの言葉にまどかは驚く。キュウベえをそう簡単に人前に出してはまずいのではないかと考えたが、その疑問にはキュウベえ自身が

答えた。

「僕の姿は魔法少女の素質がある人間か、魔法少女自身にしか見えな
いから何の問題も無いよ。」

「へー、都合のいいようにできてますなあ。」

「まあ、魔法だからね。」

と、さやかが感心するのに対して。さも当然と言うようにキユウベ
えは返す。

「……あら、もうこんな時間。結構話し込んだわね。あなたた
ち、門限とかは大丈夫かしら？」

「あ、いえ特には。」

「一応、大丈夫ですけど。」

マミが時計を見てそう言う。一応二人には門限などは無かったが、
そろそろ帰った方がいい頃合である。

「家に着くのがあまり遅くなってしまっではいけないし、そろそろ
帰った方がいいわ。」

「あ、ハイ。そうします。」

「じゃあ、私も。」

そう言って二人は荷支度を始める。と言っても荷物は学校制定の
鞆だけだったりするのだが。

「明日魔女退治に付いてくるなら、放課後に学校近くの軽食店で待ち
合わせましょ。学校からショッピングモールの方に行った所にある
店だけど。場所分かる？」

「あ、ハイ。そこならわかります。よく友達とそこで話してるんで。」

バマミが指定した待ち合わせ場所は、偶然にも彼女らがよく利用する軽食店だった。それを聞いたマミは笑って返す。

「そう、ならよかったわ。じゃあ、今日の所はさようなら。帰りには気を付けるのよ?」

「ハイ、わかりました!」

「マミさん、今日はありがとうございました。」

そうしてその日、二人はバマミの家からそれぞれの帰路に付くのがあった。

11月26日土曜日。近代都市化計画の一環として「脱ゆとり」も掲げていた見滝原中学校は、全国の公立でも珍しい土曜の六時間授業を行っていた。

そしてこの日の四コマが終わり、現在は昼休み。見滝原中学校の屋上には二人の少女と一匹の小動物がいた。その二人の片割れである鹿目まどかは、弁当からご飯を箸で一掴みすると小動物ことキュウベえの前に差し出す。

「はい。」

パクッ

キュウベえが差し出されたご飯を食べる。まどかにはそのしぐさがとても愛らしいように思えた。

そのまま弁当も食べ終わり、後片付けを済ませると、突然さやかが切り出した。

「ねえ、まどか……願い事、何か考えた？」

「うん。さやかちゃんは？」

「私も全然。何だかなあ……いつくらでも思いつくと思っただけだなあ……」

あれからお互い願い事は思いつかず仕舞いだったらしい事を確認して、さやかがそのまま続ける。

「欲しい物も、やりたい事もいっぱいあるけどさ。命懸けって所で、やっぱ引っ掛かっちゃうよね。そうまでする程のもんじゃねーよなーって。」

「うん……」

「意外だなあ。大抵の子は二つ返事なんだけど。」

キュウベえが心底意外そうに返す。まあ、何でも本当になうと言われて食いつかない人間はほとんどいないだろう。

「まあきつと、私達がバカなんだよ。」

「え……そうかな？」

さやかの思わぬ言葉にまどかは驚く。当のさやかの表情は背を向けられているまどかには見えない。

「そう、幸せバカ。別に珍しくなんかはないはずだよ。命と引き換えに少しでも、叶えたい望みって……そう言っつの抱えている人は、世の中に大勢いるんじゃないのかな？」

落下防止用のフェンスにかかるさやかの手に力が入る。

「だから、それが見付からない私達って、その程度の不幸しか知らな

いって事じゃん。恵まれ過ぎて……バカになっちゃってるんだよ……」

さやかという言葉に徐々に感情がこもる。そしてまどかは、さやかの言葉の訳をなんとなく察していた。

「何で……私達なのかな……？不公平だと思わない？こーゆーチャンス、本当に欲しいと思ってる人は他にいるはずなのにね……」

「……さやかちゃん。」

「チャンスが本当に欲しいと思ってる人」。誰の事を言っているのかは分かっていたが、まどかにはさやかの言葉にどう返せばいいか分からなかった。

一瞬の沈黙の後、この場に新たな人物が現れた。屋上への入口に、昨日来たばかりの転校生であり、見滝原の二人目の魔法少女である暁美ほむらがいた。

それを見たさやかは、まどかの前にかばうように立ちはだかる。だがほむらはその様子を気にも留めずに近づいてくる。

（大丈夫。）

突如二人の頭の中に声が響く。別校舎の屋上を見ると、バマミがソウルジェムを持ってこちらを見ていた。ほむらもそのことには気づいているようだったが、軽い一瞥をくれてやりながらも気にせずまどかたちに向かって歩いてきた。

そしてほむらが二人から数メートル離れた所で立ち止まると、先に口を開いたのはさやかだった。

「昨日の続きかよ。」

「いいえ、そのつもりはないわ。」

「さやかへの敵意のこもった言葉に動じる」ともなくほむらは否定する。

「そいつが鹿目まどかと接触する前にケリをつけたかったけれど、今更それも手遅れだし。」

憎々しげにまどかが抱いているキュウベえを睨みつけながら言う。
そして視線を改めて二人に向けてほむらは問うた。

「……………で、どうするの？ 貴女も魔法少女になるつもり？」

「私は……………」

「あんたにとやかく言われる筋合いはないわよ！」

先ほどより強い敵意を持った言葉だったが、ほむら自身はどこ吹く風。今度はまどかに対して問いを投げかける。

「昨日の話、覚えてる？」

「……………うん。」

「ならいいわ。忠告が無駄にならないよう、祈ってる。」

そう言つとほむらは言う事は言った。「とばかりに元来た道を引き返し始める。

「あ……………ほむらちゃん。あの……………」

だがそんな彼女をまどかが呼び止める。まどかはそのまま続けて口を開いた。

「あなたはどんな願いごとをして魔法少女になったの？」

ほむらの足が止まる。すると急にこちらを振り向いたかと思えば、

何も語らずにまどかを見つめ始めた。まるで、それ自体が問いに対する答えだと言うように……

しかし、すぐにまた歩きはじめる。結局まどかには、ほむら何を願ったのかが分からず仕舞いであった。

現代アートのような不気味な装飾の円形の広場。その中心には、これまた現代アートのような不気味な物が存在していた。

その不気味な物体は知る者からは「魔女」と呼ばれる存在であり、この場はその魔女が作った結界の最深部だった。

「惜しかったわね。」

つりさげられながらもバマミは勝利を宣言する。胸元に結んだりポンを解くと、それを使って自らをつりさげている魔女の腕を切断。そのまま円筒状にリポンを束ねると、これまでとは比較にならない大きさの「砲」が出現した。

バマミの持った特大の火砲が魔女に向く。射線上の魔女は彼女のリボンでがんじがらめにされ、避ける事はかなわない。

「ティロ・ファイナーレ！」

彼女の砲が火を噴く。発せられた閃光が辺りを包み込み、避ける事も防ぐ事もかなわなかった魔女を断末魔もなくそのまま消滅せしめた。

「かつ、勝ったの？」

「すっ……」

そして何の力も持たぬ一般人たる二人は、その光景に圧倒されていた。

周囲の風景が歪みだす。主のいなくなった結界が崩壊を始めたのだ。だんだんと世界が元の光景を取り戻しはじめる。

そして元の姿を取り戻した世界で、彼女たちは廃ビルの上層階に立っていた。むき出しになったコンクリの壁しかないそのフロアには西日が差しこみ、何もかもを赤く染めている。

少し離れた所に立っていたマミが魔法少女としての変身を解いて、床にある黒い物体を拾い上げた。近づいてきたまどかとさやかにそれを示しながらマミは説明する。

「これがグリーンフィード。魔女の卵よ。運がよければ、時々魔女が持ち歩いてることがあるの。」

「た、卵……」

先ほどの魔女のグロテスクな見た目を思い出して、さやかは若干引く。その様子を見たキュウベえが補足する。

「大丈夫、その状態では安全だよ。むしろ役に立つ貴重なものだ。」

「私のソウルジェム、ゆうべよりちょっと色が濁ってるでしょっ？」

今度はソウルジェムを取り出して二人に示す。透明感のある明るいオレンジだったソウルジェムは、若干かすみがかかったようになっている。

「そう言えば……」

「でも、グリーンフィードを使えば、ほら。」

そう言ってソウルジェムにグリーンフィードを近づけると、みるみるうちにソウルジェムが元の輝きを取り戻していく。

「あ、キレイになった。」

「ね。これで消耗した私の魔力も元通り。前に話した魔女退治の見返りってというのが、これ。」

そう説明するとマミは突然それを物陰に投げ込みだした。突然の行動に驚く二人。だが、投げられたグリーンフシードが地面に落ちる事は無かった。

「あと一度くらいは使えるはずよ、あなたにあげるわ…… 暁美ほむらさん？」

物陰からほむらが姿を表す。手には先ほど投げ込まれたグリーンフシードが握られていた。

「あいつ……！」

「それとも、人と分け合うんじゃない？不服かしら？」

いつからか付いてきていたらしい彼女にマミは若干挑発的な態度で臨む。

「貴女の獲物よ。貴女だけの物にすればいい。」

ほむらがそう言いながらグリーンフシードを投げ返す。

「……そう。それがあなたの答えね。」

もらわなくても十分ストックがあるからか、他人から恵まれるのはプライドが許さなかったのか、「お前と組む気は無い」と言う意思表示か。理由はなんであれ、「仲よくする気は無い」と言う事なのだろう。そんな意味合いを読み取ったマミの表情が険しくなる。

その様子を見たからか、ほむらはその場から背を向ける。マミがそれ以上彼女に声をかける事は無かった。

「くー…やっぱり感じ悪いやつ…」

「仲良くできればいいのよ……」

ほむらが立ち去った後、さやかが憤慨したように言い放つ。一方まどかは純粹に彼女の事を悪く思っていないようであった。

「お互いにそう思えば、ね……」

まどかの言葉に対してマミが言う。まどかには、その言葉に若干残念そうなニュアンスが含まれているように思えた。

魔ビルを出た一行は、魔女の呪いで自殺させられた女性の元へ向かった。すぐそこに寝かされていた彼女は、まどかたちが近づくとその気配に起こされたようだった。

「……あれ、私は……？」

目を覚ました女性は周りを見回しながらつぶやく。すると突然自らを抱えて震えだした。

「やつ……やだ、私、なんで、そんな、どうして、あんな、ことを……」

「大丈夫。もう大丈夫です。ちょっと、悪い夢を見てただけですよ。」

とつやら自らが投身自殺を図ったらしい事を思い出したらしい。震える彼女の肩に手を回しながら、マミがやさしく励ます。

「一件落着、って感じかな？」

「うん。」

さやかがその様子を見て一言。まどかもその一言に同意で返すのだった。

（叶えたい願いごとか、私には難しすぎて、すぐには決められないけれど。）

（でも、人助けのためにがんばるママさんの姿は、とても素敵で、）

（こんな私でも、あんな風に誰かの役に立てるとしたら、）

（それは、とっても嬉しいなって、思ってしまったのです。）

とある建物の地下室。太陽光の一切入らないその部屋で、一人の人物が机に向かっていた。

机を照らす光源は、そこに置かれていう電気スタンドひとつのみ。そしてその発する光が照らしている物は、事日本においては非常に物騒極まりないものだった。

銀色のリボルバーに、それに使うと思しき何発もの実包。

しかもそのサイズが尋常ではない。リボルバーは銃身だけで二十センチほどもあり、全長に至っては四十センチは届くのではないのかと言うほどに大きい。

周りに置いてある実包も、単三電池などよりも背の高い、いわゆる「ライフル弾」と言う物だ。拳銃用マグナム弾すら大きく引き離す威力のそれは、とてもではないが拳銃で撃てるような代物では無い。

そのライフル弾を拾い上げると、ムーンクリップと呼ばれる円形の金具に取り付けていく。六発の実包をクリップに取り付けると、リボルバーのシリンダーを取り出し、クリップに固定された六発の実包を装填する。

そのままシリンダーを戻すと、別のクリップにまた実包を取り付けていく。そうして六発×3セットの束が出来上がると、ふうとため息をついた。

時計を見る。現在時刻、9時58分。

「もう流石に帰ったかな？」

この街には三年前から活動している魔法少女が一人いるが、大体9時ごろには撤収している。時々それより遅くに動いているときもあるが、10時ともなれば流石にはほぼ確実に帰っていた。

そしてその人物は右腰に先ほどのリボルバーの入ったホルスターを、左腰にクリップに固定した実包が1セットずつ入ったベルトポーチ三つを通してズボンのベルトを付け直すと、壁にかけていた黒いロングコートをとってそれを羽織る。

そのままその人物は部屋の出口へと向かう。目的はただ一つ。

「それじゃあ今日も、魔女退治と行きますか。」

彼女の、日課を済ませる事だった。

第三話「これが私の力だね」

11月27日、日曜日。日も少し傾き出した頃、まどかは見滝原市立病院のロビーに居た。

別にまどかの体調が悪い訳では無い。むしろ健康体そのものである彼女には病院へ来る理由そのものがなかった。

では何故ここに来ているのかと言えば、彼女自身ではなくその連れに理由があつたからである。

「まどか、お待ちませ。」

「さやかちゃん。」

エレベータから出て来た連れ事、美樹さやかがまどかに向かって声をかける。病院に用があつたのは彼女の方だった。と、言っても彼女も体調がすぐれないという訳でもない。

「上条君、どうだった？」

「まー、一応元気。体力も結構戻ってきてるし、リハビリも頑張ってるみたいだったから。」

上条恭介。さやかの幼馴染であり、資産家の一人息子。年齢14にして「天才」とまで称される程のバイオリニストであり、

先月中旬、交通事故に遭い、それ以降入院したままになっている人物でもある。

話によると、バイオリンの教室から帰る最中のひき逃げ事故だったらしい。幸いなことに目撃者がいたことから即座に通報、搬送されたことよって一命は取り留めたのだと言う。

しかし入院したころは連日意識不明。それも今月初めになって目

を覚ましたのだが、今度は左腕の麻痺が発覚。現在は長期にわたって寝続けていたことによる筋力の衰えに加えて、左腕の麻痺のリハビリのために彼の入院生活はいまだに続いていた。

「まだ、左手は動かないみたいだけど……」

「そっか……早く良くなるといいね。」

「うん。」とさやかが力なく返す。今月初め、目を覚ました時は本当に酷かったという。まどかは彼がどれだけバイオリンに入れ込んでいたのかは知らないが、それができないことが相当ショックだったようだ。

数日すると何とか落ち着きを取り戻し、リハビリに集中できるようになったらしい。が、開始から既に数十日、その結果もあまり芳しくないという。

「……まどか、早くいこーまみさん待たせるわけにはいかないからさ
！」

「……うん。」

さやかが暗くなった雰囲気をごまかすように言う。彼女らは今日もママミの、魔法少女体験コース、についていく予定であった。歩き出すさやかに、まどかがついていく。

「えと、今日はママミさんの家に集まるんだったよね？」

「うん。そういえば、おとこのケーキおいしかったなあ。」

「あれってママミさんの手作りなのかな？」

当たり前障りのない会話をしながら病院を後にする二人。その背中を、あの白い影が見ている事に彼女らは終始気づかず仕舞いであった。

「ハッ！」

一面子供の落書きののような世界で、巴マミは跳ぶ。するとこれまた落書きのような見た目の使い魔の攻撃が、先ほどまでマミが立っていたところを突いた。マミは着地すると、手にしたマスケットでその使い魔を貫く。

「…………ふう。すばしい使い魔ね。」

とりあえず見える範囲では使い魔を殲滅し終えたマミが一息つく。

「大丈夫ですか？」

「ええ、平気よ。多分、ここを抜ければもう最深部だと思う。」

まどかの案ずる言葉にマミは笑って返しながら、目の前の扉を見る。一見ただの落書きののような扉だが、そこから漂う邪気はそこに魔法がいるという事を如実に示していた。

「なんか昨日より早くないですか？」

「きつとこの魔法の力が昨日のよりも弱いからだと思うよ。」

「確かに、使い魔の数も少なかったような……………」

さやかか問いにキュウベえが答え、まどかが納得する。

「まあ、どの道危険な事に変わりないのだから、油断は禁物よ。あなたたちは昨日と同じ様に後ろに下がっててね？」

「ハイ！」

「わかりました！」

魔女との戦いに入る前にママが注意を促し、まどかとさやかがそれに答える。

「じゃあ、行くわよ。」

そう言ってママはその扉を押し開けた。

落書きの魔女
Albertine

扉を抜けるとママはまどか達の周りにリボンの障壁を張り、周辺を見回した。

昨日と同じく円形の広場だ。壁はこれまでと同じように子供の落書きのような模様をしていたが、そこにはやけに大きな積み木やクレヨンが散乱していた。

ざっと辺りを搜索するが、魔女の姿は全く見えない。

と様子を見ていると使い魔が数体飛び出してきた。

「ぶっぶっぶっぶっぶっぶっんー！ぶっぶっぶっ、ぶっぶっぶっぶっん！アハハアハアハア！」

子供の声真似のような声を喚かせながら飛び回る飛行機のような使い魔がママに攻撃を仕掛けてくる。

それに対してママは軽くバックジャンプしながらリボンを取り出し、数丁のマスケット銃を生成すると使い魔を瞬く間に撃ち落とすってしまった。

「わぁー！」

「すい……」

目の前の早業を見て、まどかたちが感嘆の声を漏らす。だが事態はこれではまだ終わらない。

使い魔がまた物陰から飛び出してくる。数も先ほどより多い。

マミもマスケットを大量に呼び出し、使い魔たちを迎撃していくが、物陰から次々湧出する様を見て内心舌打ちする。

(もたもたしていると物量で押しつぶされる……早く魔女を討った方がいいわね。)

だがそう簡単にはいかない。状況を見るに魔女はどうやら小さめのようなのだが、障害物が多すぎる。普通に探すとなれば、かなり骨が折れる作業になるだろう。

(ならー！)

マミが二丁のマスケットを左右仰角高めに撃ち込む。リボンの尾を引きながら飛んで行った弾丸が壁に突き刺さると、マミはそのリボンを左右両手で掴む。すると、

「ハッー！」

まるでそのリボンがゴムでできていたかのようにマミを持ち上げ、空中に打ち上げた。こちらへ向かってくる使い魔の間を通り抜けながらマミは上昇する。

そして空中の使い魔より高いところまで上がると、今度は大量のマスケット銃を召喚する。直後、地上に照準が向けられたそれらが一斉

に火を噴いた。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア…」

放たれた弾丸は広場全体の地面に穴を穿つ。当然、銃と地面の間にいた使い魔は蜂の巣である。

一瞬にして使い魔たちを一掃してしまったマミだが、まだ彼女の手番は終わらない。地面に空いた穴からリボンが伸びだし、周辺に有る物と言つ物をからめ取りながら伸びていく。

銃弾は床全体にばら撒かれていた。この空間にいる物はその殆どが彼女のリボンに囚われる事となる。

「あ…」

「マミさん…あれ…」

と、なると体躯の小さな魔女がそのリボンに捕まる事は必然であった。マミは落下しながらもリボンに囚われ必死にもがいているヒトガタを確認すると、地面から伸びているリボンを数本引きちぎった。

「悪いけど、速攻で」退場願えるかしら…」

その数本のリボンを円筒状に束ねると、巨大な砲を形作る。放たれるのは、**田マミ**のいつものフィニッシュプロロー。

「ティロ・フィナーレ！」

閃光が走る。

その光がヒトガタを飲み込むと、瞬く間にその形を崩していき、その姿をこの世から消し去った。

魔女を倒したことにより、結界が崩壊したそこは歓楽街の一角であった。西日が差して赤く染まる路地で、グリーンフィードを拾い上げるマミにまどか達が近づいてくる。

「けがは無かった？」

「はいーマミさんがばっちり守ってくれたおかげで何ともないです」

マミの確認にさやかが元気良く返す。そんな彼女の様子に安堵したかのようにマミが笑いかける。

「なら良かったわ。途中、鹿目さんたちがいること忘れて思いっきりぶっ放しちゃったから、どうしようかと…」

「えええ!？」

「ふふ、冗談よ。」

まどかたちの驚いた様子にマミが笑う。さやかたちも後の言葉に自分たちがからかわれたことに気づいたようだ。

「び、びっくりさせないで下さいよ……」

「ふふ、しめんなさい。……あらっ」

突然マミが怪訝そうな顔をして辺りを見回しだすと、ソウルジェムを取り出した。

マミの突然の行動にさやかがソウルジェムを覗き込む。

「どうかしたんですか……って、ええ!？」
「さやかちゃん、どうしたの?……ええ!」

驚いた様子を見せるさやかに、まどかもつられて覗き込む。そこには強い反応を示して輝く宝石があった。これはつまり、まだ周りに魔女なり使い魔なりが存在するという事に他ならない。

「そんな、魔女はさっきマミさんがやったのに!」
「……いや、これはさっきの魔女じゃないよ。」

驚きながら声を上げるさやかにキュウベえが返す。その言葉にマミが続く。

「きっと、近くにもう一体魔女が居たんでしょうね。さっきの魔女とは少し魔力の波動が違うもの。」
「そうなんですか?」

マミがさらに辺りを見回して歩き出す。そして路地をさらに奥に行った所で足を止めた。

「此処ね。」

マミがソウルジェムを輝かせると、結界への入口が出現する。
先ほどとは違う模様の入口。だがそれは、これまで結界の入口とは若干様子が違っていた。

「……なんかこれ、チカチカしてません?」
「あ、ホントだ。」

まどかたちが結界の入口を見たのは二回だけなのだが、この入口はそれらと比べて揺らいでいるように見えた。マミもその様子を見て

口を開く。

「……どうやら、先に誰かが結界に入って戦ってるみたいね。」

「え!？」

「じゃああの転校生が?」

現状、見滝原に居る魔法少女は巴マミを除けば一人である。戦っているとするれば、その残りの一人である暁美ほむらしか考えられない。

「……万が一、と言っ事もあるから。一応行っておきましょう。」

「え?手伝うんですか?」

さやかがマミの言葉に思わず反応する。

「いいえ、余裕そうならそれでいいし、危なくなったら助けに入る。一応、貸は作っておきたいしね。」

そう言ってマミが変身する。一丁のマスキットを生成すると、そのまま入口に向かっていく。

「じゃあ、行くわよ。鹿目さんたちは私から離れないようにね。」

「は、ハイ。」

そうして一行は再び結界内に足を踏み入れていった。

積み木や人形などと言った子供用のおもちゃがそこらに落ちている結界をまどか達は進む。

「……敵、出てきませんね。」
「そうね。」

マミは警戒を続けながら返す。だが、一行らが結界に足を踏み入れてから既に数十分が経過しているが、未だ一度も使い魔の襲撃を受けていなかった。

(一体、どんな人がやったんだろう……)

まどかが頭の中で不思議がる。結界に入る前はもう一人の魔法少女、暁美ほむらが戦っている物と考えていた。が、現在ではその可能性はほとんど消えてしまっていた。原因は、結界のそこらじゅうに刺さっている「ある物」のせいであった。

剣だ。

全長は一メートルと少し、幅四センチで両刃。全体に銀色で、三センチ程の柄の部分は黄色の紐で覆われている。鍔は無く、代わりに薄黄色の宝石がはめ込んであった。

そんな少し離れた所から見ると、ただの棒のようにも見える剣が、入口からここに至るまでそこらじゅうに刺さっていたのだ。

最初はほむらの魔法少女としての能力かと思われたが、キュウベエの証言によりその可能性は殆どなくなってしまっていた。

「僕を襲った時、彼女は軍隊で使っている拳銃で攻撃して来たんだ。彼女の能力とは、多分違うと思う。」

魔法少女としての攻撃手段があるのなら、拳銃など使う必要は無いはずだ、と言う。

では誰の能力なのか？と言う事になるが、マミがさらにその剣を調

べて分かった事は、彼女らにさらなる混乱を与えただけであった。

「この剣……あなたたちに掛かってた魔力と同じ物で出来ているわ。」

ママのこの判定に二人は大いに驚いた。しかもこれは、今戦っている人物がほむらではないことを示しているらしい。

なぜなら、「この魔法はほむらが掛けた物ではないか？」と言っさやかの問いに対して、ママがこう答えたからである。

「あまりあなた達を不安にさせないようにしようと思って黙ってたんだけど……」

その魔法、数年前から何度も重ね掛けされてる物みたいなのよ……」

ママが効果もわからないその魔法を「安全な物」と判断したのは、その事もあつての事だったという。数年前から掛かっているにも拘らず、これまで一切何の支障も出さなかったのだから、と。

そして当然、その頃にほむらとの繋がりなど有る筈が無い。また、ママの昔の知り合いが隣町に住んでいるようだったが、それも違つらしい。

ここに来て、全く情報がなくなってしまったかと思いきや、一つだけ心当たりがあるという。キュウベえがその事について語る。

「どうも誰かが、僕達の知らない間に魔女を倒しているようなんだ。」

話によると、魔女が倒され出したのは、ママが魔法少女になる数年前からとの事だった。それはママが魔法少女となった後も続いているらしい。

当然、ママはこれまで何度も接触を試みた。しかしその試みは、悉く失敗に終わっていた。

「一度、結界が消滅した直後に行ったことが有ったけど、結局その時も会えず仕舞い……一体何を考えているのか……」

そして今、これまで影も形も見せなかった人物が、ようやく尻尾を見せた。期せずして訪れた接触の機会にマミは緊張し、まどかたちは誰とも知らぬその人物に思いをはせる。

そうこうしていると、一枚の扉が見えてきた。どうやら最深部のようである。

この先に、自分より長く戦い続けていた人物がいる……そう考えると、マミの銃を握る手に力が入る。

「……入るわよ。鹿目さん達は絶対私から離れないで。」

まどかたちが無言で頷く。それを確認したマミは、魔女のいる最深部への扉に手をかけた。

R o s a s a g a g n
玩 具 の 魔 女

これまでと同じような円形の広場。だがその様相は、非常に荒れた物だった。

恐らく使い魔なのだろう。デフォルメされた黒いカエルのような人形が、そこらじゅうで磔にされている。刺さっている剣はやはり先ほどの銀色の物だ。

それを見ると今度はあたりを見回す。が、そこらにおいてある柵やおもちやなどが障害物となり、全体の様子をつかがう事を阻まれた。と、ここまで状況を確認した時だった。

激しい金属音が鳴り響く。

どうやら少し離れた所で起こっているようだ。マミは近くにあった棚やおもちゃの壁に身を隠しながら覗き込む。まどかたちも同じ壁に寄り添い、おもちゃの間から戦場を覗き込んだ。

魔女がいた。人型で、身長はまどかの腰ほども無い。頭に白い頭巾をかぶり、顔はつるりとした黒一色で、口などのパーツは一切見られない。

とは言っても彼女は既にボロボロであった。服のそこかしこは解れ、肩には先ほどの剣が刺さっている。見るからに瀕死である。

魔女の目の前が光る。どうやら使い魔を召喚したらしい、先ほど磔にされていたカエルが二体出現する。

だが、次の瞬間

剣が降り注いだ。

雨のように……と言っただけでは無い。マシンガンで一薙ぎしたような降り方だった。

しかし、それらはそこに居た魔女と使い魔を針山に変えるには十分だった。カエルも魔女も、瞬く間に地面に縫い付けられてしまう。

四肢と胴体を複数の剣で貫かれ、縫い付けられた魔女。そんな彼女に近づく影があった。

黒いコートの人物だ。顔は、まどかからでは視界の関係上伺う事は出来ない。

「あれが……」

マミがつぶやく。自分より先に、より長い間見滝原で戦っているという人物が目の前にいるのだ。彼女なりに思うところがあるのだろ

う。

黒コートの上に、六つの剣が浮いている。だがそれらは、直径十センチほどの薄黄色い光の環が鐔のように付いていた。切っ先は皆、魔女に向いている。

だが黒コートはその剣をどうこうする事は無かった。代わりにその右手が上がり、とある物が魔女に向けられる。

リボルバーだ。銀色で異様な大きさのそれが、魔女の頭に向けられる。

魔女は必死にもがくが、脱出は叶わない。次の瞬間。

閃光が、魔女の頭を撃ちぬいた。

魔女の結界が解ける。おもちゃだらけだった空間が、その姿を崩していく。

そして、元にとった世界で、彼女らは公園に立っていた。どうやら結界の中で歓楽街近くの公園まで移動して来たらしい。

運のいいことに、黒コートとの間には遊具が立っていた。まどかは結界が解けたことで障害物が無くなり、発見されるかと思ったが、どうやら杞憂に終わったらしい。

だが、次の瞬間まどかとさやかに驚愕が襲いかかる事となる。

「……………とまあ、これが私の力だね。お気に召しましたかな? …… 暁美、ほむらさん?」

恐らく黒コート之物と思われる言葉に、マミが身構える。どうやら今の今までいないと思っていたもう一人の魔法少女も、またここに存在したらしい。

まどかとさやかも予想していなかったことだが。今はそれ以上に別の事に驚愕していた。

「ええ、十分よ。それだけやれば、足手まといにはならないでしょう。」

先ほどの声。恐らく黒コート之物と思いきそれに、まどかたちは聞き覚えがあった。

「いいわ、あなたの實力は認める。その時はよろしく頼むわよ。」

……いや、聞き覚えがあるどころの話ではない。彼女らはこの声を、ほぼ毎日聞いていたではないか。

そう、この声の主は、まぎれもなく……

「……秋水、キツカさん。」

彼女らの友人である、キツカ之物ではないか？

26日にキツカが学校を休んだのは、実際の所風邪が原因などではなかった。

ではただのズル休みかと言われればそうではない。常人にしては明らかに不自然な要素を多分に含んだ転校生、暁美ほむらの調査のためである。

最もそれはキツカ自身がその「非常識」な存在であったからこそ気づいた物だったが、そこはいい。彼女を丸一日潰してまで調査したのはほむらが「非常識」な側の人間であるからではない。

キツカの友人である鹿目まどかに対する異常なまでの執心。

危険な域にまでは達してはいなかったが、それでも「非常識」な立場の人間に興味を持たれているのだ。何か危害を加える可能性を鑑みて、丸一日調査することにしたのだ。

で、その結果はどうだったのかと言えば、「まどかに執着する理由は不明。ただし害意は無いようなので、とりあえずは無害と言う判断でよし。」と言う物だった。

とりあえずの結果を出したのち、次にキツカがとった行動はほむら自身への接触だった。これまで「魔法少女」と言う物との接触を極力避けてきたキツカであったが、この後巴マミに鹿目まどかや美樹さやかに関する話で接触しようと思っていたのだ。いまさら自分の存在を隠しても意味は無いだろうという判断からだった。

そして27日の夕方。キツカは、歓楽街の路地に足を踏み入れた。人気のないそこを少し歩くと、そこには暁美ほむらの姿があった。

目の前には結界への入口。先ほど確認したが、どうやらマミ達一行がこの中に先行しているらしい。キツカは後からついていくように入ろうとするほむら呼び止めた。

「ちょっと待ってくれないかな？」

「…」

ほむらは驚いた顔でこちらを振り向く。誰もいないと油断しきつ

ていたらしい、こちらを振り向いた瞬間は少し呆けているようにも見えた。

「あなたは……」

「アンタが一昨日転校してきたクラスの人間で秋水キツカって名前だ。まあ、今後よろしく。」

簡単な自己紹介。だがほむらのキツカを見る目は厳しい。敵なのか味方なのか測りかねているからだろう。

少しキツカの姿を見た後、ほむらが口を開いた。

「……そう。それで、その恰好。あなたも魔法少女と言っ訳かしら？」
「うん。残念ながら、ハズレ。そんなファンシーな物になった記憶は無いね。」

ほむらが驚いた顔になる。なんせ今のキツカの恰好と言えば黄色のベストにクラバット、その上に黒コートと言っ、どう考えてもコスプレ以外の何物でもないような恰好なのだ。そう思ってしまったのも無理は無いだろう。

「………なら、なぜそんな恰好をしているのかしら？」

至極まっとうな問い。人気のない路地とは言え、街中でそんな恰好をする理由など見当たらないのだ。だがキツカはこれにもおどけて答える。

「実用を兼ねたコスプレだね。ふざけれる範囲なら、ふざける主義だからね。」

「………」

ほむらが沈黙する。恐らくこれまで会ったことの無いような人種

に少々驚き、あきれているのであろう。その彼女に対してキツカが言葉を投げかける。

「……で、まあ私が何者なのかは後にでも説明しようと思う。それより、今日はちよつとアンタに聞きたいことが有るんだけど。」

「……何かしら？」

おどけながらも後半部に含まれた真剣さを読み取ったほむらが反応する。キツカはそのまま口を開く。

「まず最初に、前提として私の行動原理を伝えておく。私は基本的に私と、それに連なる者……はつきり言つたら、まどかやさやかなんかに危害を加えるような存在の排除だ。その上で聞く。」

……あなたの目的は一体なんだ。暁美ほむら。」

先ほどまでのおどけた様子を完全に消し、真剣な様子で聞く。その問いに対して、ほむらはキツカの目を見て返した。

「……そう、なら安心していいわよ。その条件なら、あなたと私の利害が対立することは無いでしょうから。」

ほむらが答える。その内容は、ある意味ではキツカが聞きたかった答えではあるが、彼女の問いに正確に答えている物ではなかった。

「それは、目的は言えない。と言つ事でいいかな？」

「……」

（……だんまりか。）

沈黙。どつちやら答えるつもりはないようだった。

さて、どつちするか。とキツカは思索する。

(曉美ほむらの目的は、「このままだと聞き出せそうにないね。目的そのものについて把握していないとちょっと不安だけど。一応、さっきの「前提」に対して「対立は」しないと断言しているし、嘘をついている様子もない。今日の所は一旦保留として、また追々調べればいいか……?)

と、そこまで考えた時だった。

ほむらが結界に突入しようとして取り出していたソウルジェムが、突然輝き出した。ほむらがそれを見て驚いた様子を見せる。

「これは魔女？しかもこの波長……さっきの魔女とは違う。」

「どうやら、別の魔女が来たみたいだね。どうする……って、これじゃ選択の余地も無いか。」

周囲の風景が歪みだす。どうやらキツカとほむらは魔女の結界に巻き込まれたらしい。

暗い路地がおもちゃ箱の中のような世界に変貌していく……

「あなた、戦える？」

「やるうと思えば、魔女も屠れるだけの自信はありますが、何か？」

キツカが右腰に差していたリボルバーを引き抜く。同時に空中に六つの光の輪が浮かび、そこを起点に剣が生成されていく。

それを見たほむらが少し考え込む様子を見せる。数泊おいてから、ほむらが口を開く。

「……今、目的は言えない。だけど、私はその目的のために戦力を集めている。」

「つまり、協力してほしいと。」

「あなたの實力によってそれは決めるわ。」

キツカのさえぎるような言葉に、ほむらが切り返す。それに対してキツカがさらに言う。

「それは、「」の魔女との戦いを以て判断するということ事でいいかな？」

「まあ、そう思ってくれても構わないわね。」

キツカの言葉に肯定で返すほむら。

と、ここで使い魔が飛び出してきた。しかしキツカは剣を飛ばして、それらを一瞬で磔にしてしまう。

「グケッ！」

剣が射出された光の環に、再び剣を生成する。

「何を倒すつもりなのかは知らないけど。まあせいぜいお眼鏡にかないような頑張るとしますか。」

そう言ってキツカは結界の最深部に向けて歩き出した。

魔女を撃破したキツカが結界が解けた後に立っていたのは歓楽街近くの公園だった。

遊具の少ないそこで、キツカはすぐそこに落ちている黒い球体を拾い上げると、ほむらの方に投げつけた。

ほむらがそれをキャッチしたのを確認して、キツカが口を開く。

「一応、私には必要ないものだからね。今回は譲るよ。」

「……そう。ならありがたく頂かせてもらっわ。」

変身を解いたほむらが、私服のスカートのポケットにそれを入れる。

「これから私は巴マミに文句言っついでに、私について説明するつもりだけど。ついてくるっ。」

そのまま背を向け立ち去ろうとするほむらにキツカが声をかける。

「遠慮しておくわ。あなたの話はまた今度にも聞かせてもらっわ。」

「そうですかい。」

それに対しほむらは振り向くこともなく返す。だがキツカは特に気分を害した様子もなく彼女を見送った。

「……で、隠れてないで出てきたらっ。」

キツカが突然声を上げる。既にほむらの姿は見えない。

それを聞いたマミが影から出てくる。だがまどかとさやかは出てこない。恐らくキツカを警戒したマミがそっささせているのだろう。

「……あら、何の用かしらっ？」

「聞いてたでしょ？文句があるって。まあ、立ち話もなんだし、場所を変えて話そっか。」

マミに向かいながら、キツカが提案する。相変わらず警戒した様子を見せるマミにキツカは続ける。

「私の家なんかどうだろう。安全は保障するけど。」

「……分かったわ、そうしましょう。」

「そっか、分かった。」

マミは少し考え込んでから答える。それを聞いたキツカはマミに背を向けた。

「じゃあ私は一足先に家に戻る。私の家はまどか達が知ってるから、そっちに聞いてね。」

そしてそう言い残して走り出し、近くの建物の屋根に飛び乗って行ってしまった。

キツカが行ってしまった事を確認して、まどかたちが出てくる。マミがそちらを向くと二人に問いかけた。

「あの子、鹿目さんたちの知り合い？」

「は……ハイ。キツカちゃんっていう小学校の頃からの友達で……」

「あーもう！どうなってんのよ！何かキツカは魔法使ってるし！変な格好してるし！何か転校生とは話してるし……」

まどかがかかなり戸惑った様子で答える。さやかもかなり困惑しているようだった。

「そう……分かったわ。」

「あの、マミさんはどうするんですか？キツカちゃんのウチなら分かりますけど……」

未だ困惑した様子を隠せないまどかがマミに問いかける。そんな彼女に少し考えてかマミは答えた。

「……あなたたちの友達みたいだし、大丈夫でしょう。鹿目さん、彼女の家に案内してくれるかしら？」

「は、ハイ。分かりました。こっちはです。」

ママが笑いかけながら返したことに、まどかは少し安心したのだから。まどかは少し表情を緩めると歩き出した。

そうして一行は、秋水キツカの家に向かう事となった。

第四話「この世界は、いつだって……」

喫茶、「秋水」シユウスイ。

店主たる「秋水治」アキミズ氏の苗字の別読みから名づけられ、「秋の頃の澄み切った水」と言う意味の言葉を冠した店の前に、三人の少女と一匹の小動物が立っていた。

「ここが秋水さんの自宅？」

「はい。家自体の入口は横に回ったところにあるんですけどね。」

夕日に照らされ、赤く染まった三階建ての建物をママは見上げる。まどかの話によると、一階は喫茶店、二階以降は一家の居住スペースになっているらしい。

「五年ぐらい前にキツカちゃんが引っ越して来た時に出来たんです。」
「昔から結構遊びに来てたりしたよね。」
「結構いい感じの雰囲気の喫茶店ね。なんでこれまで知らなかったのかしら……」

開店中の店内を外から覗きながらママが言う。彼女はそういう店をよくチェックしていたはずだったが、この店については全く持って初耳であった。

「なんか、その辺不思議だよね。結構いい店のはずなのに、あんまり有名じゃない。」

「うん、お昼時になっても満席になってる所って、ほとんど見ないよね。」

さやか、まどかが順番に語る。どこか落ち着いた雰囲気のいい店であったが、どっという訳か昔から知名度は殆どなかった。そのせいか、

お昼時でもほぼ確実に二・三席あいていて当然、と言つような光景がよく見られた。

「そうなの？……また次の機会に客としても来てみようかしら？」
「あ、ここで何か食べるんならオムライスがいいですよ。卵の加減が良くて、ふわつとして……」
「へえ……」

ママミの言葉にさやかがおすすめの品を挙げていく。ママミもそれに反応するが、いつの間にか緊張感が吹き飛んでしまっている事に気づいて、堰払りする。

「え、えーっと。入口は横に回った所だったわね？」
「え、あ、ハイ。こっちです。」

そう言つてまどかが店の右の方に向かう。そこには「秋水」と書かれた表札に、カメラ付きインターホンが取り付けられてあった。

「じ……じゃあ、行きますよ？」
「ええ、お願い。」

まどかが少し遠慮がちにインターホンのボタンを押した。
ピーンポーンと言う電子音が鳴る。するとすぐに反応があった。

『いらっしやい。鍵は開いてるから入ってきて。場所は私の部屋ね。』

そう言つたつきり、インターホンの接続が切れる。
まどかがママミの方を振り返ると、それを聞いたママミは口を開いた。

「……じゃあ、行きましょつか。」

秋水キツカの自宅。その三階南東方面にある一室が、秋水キツカの自室であった。

「ん、来たね。」

扉を開いて入ってきたまどかたちに、キツカが声をかける。彼女は部屋の南東の隅に配されているベッドに腰かけていた。

「ブッー！」

「き、キツカちゃん……その恰好は……？」

服装は、先に会った時から変化は無し。あえて言うなら、ロングコートを脱いでいるぐらいだろうか。

出落ちもいいところな服装で居たことに、さやかが吹き出す。先ほど公園に居た時はいいとして、まだ家でもこの恰好でいるとは思わなかったようだ。

「実用を兼ねたコスプレだけど？」

「コスプレなんかいい！」

「魔法少女じゃないからね。変身なんて……出来なくもないけど、こっちの方が低燃費だから。」

「べつにいい事かしらっ？」

さらりと魔法少女であることを否定する発言が出たことに、ママが反応する。

「とりあえず何もなし、と言う訳にはいかないし。ちょっと飲み物を

取って来るから、ちょっと待っててね。」

そう言って部屋からキツカは出て行った。取り残された三人が、部屋のご真ん中に置いてある机を前に座る。

ベット周辺にぬいぐるみが散乱しているまどかの自室や、三角形のガラステーブルと言う小洒落たインテリアのあるマミの自宅などに比べると、随分と「女の子らしさ」に欠けた部屋だった。

机の類は、勉強机に折り畳みの机が二脚。それに、部屋のご真ん中の机は、布団を取っ払っただけの炬燵だった。窓に掛かっているカーテンも布団も無地の黄色で、特にこれと言った柄もついてない。置いてある本棚も、一番上の列が「日本の歴史」と言う漫画が占有している事以外、特筆すべき様な本は見当たらなかった。

しばらくすると、オレンジジュースのパックと色の違うコップ四つを盆に載せてキツカが戻ってきた。それぞれの前にコップを配してジュースを注ぐと、机を挟んでマミと向かい合うように座した。

「っ。じゃあ、まず自己紹介から行きましょっか。」

私の名前は秋水キツカ。名前は橘の花、と書いて橘花キツカと読みます。

もう聞いているとは思いますが、まどかたちとは小学三年生の頃から付き合いになりますね。」

「私は田マミ。見滝原の三年生で、魔法少女をしているわ。」

……それで、あなたは一体何者なのかしら？」

先ほど、確かに彼女が魔法を使うところを見たマミだったが、本人は魔法少女ではないという。しかしマミは、魔法を使う存在を魔法少女と魔法の二つしか知らなかった。

この問いに対してキツカは考え込むように数泊置くと、こぼれ出て来たように言葉を紡いだ。

「うーん……魔術師、魔女、奇術師、魔法使い、魔導師……年齢を加味すれば、魔法少女でもいいんだろっけど……単語が被るから魔女と魔法少女はダメか。」

魔法……と言っより魔術が使える普通の人間。としか説明できないかな……」

見方によれば、はぐらかしているようにも聞こえる回答。だが本人は自分の身分と言っ物をあまり考えたことが無かったらしい。それ以上の説明の術を持たないようだった。

「魔法と魔術は違うの？」

「いや、私が勝手に呼び分けてるだけ。私が『すごい』と思っ物を魔法、それ以外を魔術って呼んでるだけです。」

気になった一言を問っていくマミ。彼女の質問はまだ続く。

「魔術は誰でも使えるの？」

「才能と方向性は十人十色でしょうけど、多分少しは出来るんじゃないですかね？六割ぐらいは魔法少女みたいに戦っるのはキツイと思いますけど。」

「そう……ちなみに魔法少女については、どのぐらい？」

「キュウベえとか言っのと契約するとなれる、魔女と使っ魔っつていうのがいる、魔女を倒すと報酬がもらえるらしい……これだけですかね。キュウベえとの接触は避けてたから、説明は受けてないですのっで。」

キツカの言葉を受けて、確認のためにマミがキュウベえの方を向く。すると今まで聞きに回っっていたキュウベえが口を開いた。

「確かに君とは今まで一度も会った事が無かったね。所で五年前の秋ごろから魔女を倒して回っっているのは、君かい？」

「うん、そうだけど？」

キュウベエの問いを、キツカはさらりと肯定する。

「魔女退治をしていたなら、僕とも遭遇すると思うんだけどね……
いったいどういう手品を使ったんだい？」

「一種の認識障害魔術だよ。キュウベエと、私を探そうとする人間から見つからないように設定してたからね。……まあ、流石に戦闘中に遭遇されたら効果なんてない訳ですが。」

「だからあれだけ探しても見つからなかったのね……でも戦ってる
と、その魔術も意味は無いのよね？偶然見つかるとは思わなかったの
？」

何ともない事のようにキツカは返すと、再びマミが疑問を口にする。それに対してキツカの口が再び開く。

「活動時間帯が違いますからね。巴さんは遅くても10時には帰って
るみたいですけど、私は10時から1時にかけてが活動時間帯ですか
？」

「随分と夜遅くに戦うのね。」

「当然でしょう、でないと学校やまどか達との生活に支障が出ますの
で。」

キツカがジュースに口をつける。すると次に問いを発したのは
キュウベエだった。

「じゃあ君が戦う理由は何なんだい？さっき君はグリーンフィードにつ
いて『必要ない』って言ってたよね？グリーンフィードが必要ないなら、
君が戦う理由は無いと思うのだけれど。」

魔女との戦いと言う物は、常に命がけだ。出来れば、誰もやりたく

は無い事だろう。にもかかわらず魔法少女が魔女と戦うのは、
見返りがあるからこそだ。
グリーフシード

しかし、キツカは魔法少女ではない。他に使い道があるならまだしも、それは先ほどの公園での彼女の一言が完全に否定してしまっている。そう、彼女が魔女たちと戦っても何の見返りもないはずなのだ。

「手元に銃があった。外には凶暴な狼がいる……さあ、どうしますか？ つまり、そういう事だよ。」

力があるから、倒した。気負いもせず、緊張した様子もなく言い切った。

「じゃあ、あなたもこの街のために？」

「それはちょっと違いますね。私の知らない人間が、知らない場所で、勝手に死んでいく分には、責任なんて持てませんし、持つ気もありませんので。」

だが、何も公おおやけに対する無償のボランティア、と言う訳では無かったようだ。キツカがそのまま続ける。

「流石に目の前で誰かが手に掛けられそうになったら、助けますよ？ 目覚めが悪いので。」

でも、あくまで私の目的は『友達や学校での日常を守る事』ですか
ら。」

先と同じく、やはり気負う事もなくキツカは言い切る。彼女の言葉はまだ続く。

「私は、まどかたちと普通に過ごしたい。そして、それを阻害しうる存在たる魔女の事も容認できない。だから、叩く。それだけです。」

言う事は言った、と言わんばかりのキツカ。だが、マミはこれを聞いて尚……いや、より一層分からない事があった。

「……分からないわね。あなたにとっても、魔法少女にとっても、魔法は敵。しかもあなたは、グリーンフィードの事に対立することも無いはず。戦力が増える分、あなたにとって得な話のはずなのに、なぜ私たち魔法少女と連携しようとは思わなかったの？」

魔女を共通の敵としながら、利害関係の対立もあり得ない。ならば、手を組んでもよかったはずである。いや、むしろそちらの方が、より安全且つ効率的に魔女を処理できたはずだ。

それに対してキツカは、また一口コップを傾けてから答えた。

「ああ、それなんですけどね？実は巴さんが魔法少女になる前に、別の魔法少女がこの街に来たんですよ。

その時に何が気に入らなかったのか、よそから来た癖して『とつとと出てけ』なんてのたまつ物ですから。ボコボコにして叩き返した事があります。『ああ、ちょっとこりゃ連携は無理かな？』と判断した次第で。」

それから、とキツカは続ける。まだ理由はあるらしい。

「私を経由で、キュウベえがまどかたちに関わってほしくなかったから。さっきも言ったように、私は普通に暮らしたかった。だからまどかたちには関わってほしくなかったし、キュウベえにも会わせたくなかった。……まあ、今となっては、ですが。」

「キツカちゃん……」

キツカの言葉に、まどかは少し申し訳なさそうな顔をする。さやかも口にはしていないが、若干申し訳なさそうな雰囲気を出している。だがマミの質問はまだ続いた。

「所で、秋水さん。さつき公園で暁美さんと話してたようだけど……あの子とは、どういうっ？」

キツカに放たれた次の質問は、マミに対して、敵対するかのようない行動、言動をとる魔法少女、暁美ほむらについてだった。キツカは先ほどの公園で、まるでほむらと協力関係にあるような会話をしていたが、一体どういう事か？と。

その問いに対してキツカは少し考え込む様子を見せた。

「うーん……実をいうと、まともに会話したのは今日が初めてなんですよね。」

「そうなの？」

「はい。どうも戦力を欲してるらしい、ということとぐらいしか。」

尚も考え込む様子を見せるキツカを見て、マミもまた考え込む。どうやら本当にそれ以上は何も知らないらしい。

「戦力ねえ……」

キツカから少しでも情報を得ようとしたマミだったが、結局彼女に与えられたのは、更なる混乱のみだった。

戦力が欲しい。何が目的なのかは分からないが。それはマミと敵対するような行動や、まどかたちの契約を嫌がっているかのような言動とは一致しない物だ。戦力が欲しいなら、魔法少女の数は多いに越したことはないだろうし、戦力になり得るマミに敵対するような行動を取る理由などないはずだ。

と、そこまで考えていたところで、キツカが口を開いた。

「質問は、以上でいいですか？」

「……ええ、一応聞きたかったことは聞けたし。私たち魔法少女につ

いては大体知ってるみたいだけど、しておいた方がいい？」

キツカへの質問を終えたうえでマミが提案する。それに対してキツカは少し思案してから答えた。

「うーん、そうですね。大体把握はしてますが、まだ一度も話は聞いて無いんで。一応聞いておきます。」

「じゃあ、その説明は僕にやらせてもらってもいいかな？彼女にも素質があるみたいからね。」

キツカの回答に、キュウベえが割り込んできた。マミはその言葉を聞いて、考え込むような動作を見せる。

「……そうね、分かったわ。あなたに任せる。」

「ありがとう、マミ。」

そしてキュウベえが軽やかに机に跳び乗ると、キツカの方を向き、口を開いた。

「じゃあ、キツカ。改めまして。僕の名前はキュウベえ。僕と契約して、魔法少女になってよー！」

結局のところキツカが知らなかったのは、契約の対価たる奇跡の事と、魔女退治の報酬たるグリーンフードが、どのように作用して報酬たり得ているのかと言う事だけであった。

全てを聞いたキツカがキュウベえを見つめる。

「……なんでも、ねえ？」
「そう、なんでもさ。」

キユウベえの言葉を反芻するキツカ。とても胡散臭そうに感じているようだった。そのまま目を細めてキユウベえを見つめる。

「……………」
「そんなに信用できないかい？」

キユウベえの一言にキツカが黙り込む。だがそれもしばらくすると、懐疑的な眼差しを突き立てながらではあったが、口を開いた。

「一応、理解はした。契約する気は無いけど。」
「まあ、そうでしょうね。」

魔法を元から使える身であるが故に、「魔法少女」と言う物に魅力は感じなかった上、特に渴望するような願いも無いため、契約するような理由が微塵も無い。キツカにしてみれば、ただただひたすら胡散臭い契約など、断るのは至極当然であった。

「……………まあ、一応これでお互いに関する情報交換は終了して、本題に入りましょう。」

そうキツカが声のトーンを上げて改めると、そのままざしをマミに向けながら口を開いた。

「巴さん、あなたは昨日からまどか達を魔女退治に連れて回ってるみたいですけど……………」

「……………やめろ、と言っ訳ね。」
「ええ、そうです。」

実を言うと、ここに来る前にまどか達から「キツカは自分たちの友人である」と言う事を伝えられた時から予測していた文句であった。自分の友人を、大なり小なり危険な場所に連れて行くとうというのだ。文句の一つも無い、と言う方がおかしい。

だが、マミとて理由もなく巻き込んでいるようなつもりはない。マミはキツカに向かって口を開く。

「でも必要な事よ？ 実際に魔女と戦った事の有るあなたなら分かるはず。」

「分かりませんね。魔女と戦った事があるからこそ、余計に。」

だがキツカはマミの言葉にびしゃりと返し、そのまま言葉を続ける。

「そもそも、無関係な一般人を連れて結界に入ること自体が理解できませんよ。」

「無関係では無いはずよ？ 心配なのは分かるけど。彼女たちはキュウベえに選ばれたんだもの。こちら側の事を知っておかないと、踏み込んだ時絶対に後悔するわ。」

戦いの厳しさを知らずに踏み込ませ、後悔させる訳にはいかない、とマミは訴える。それに対してキツカは少し考え込む様子を見せたが、すぐに口を開いた。

「……なるほど、確かにあなたが連れまわす如何で、こちら側に踏み込めるかどうかは変わらない。ですが、それでも反対ですね。」

「じゃあ、なぜ？ こちら側への入口がある以上、命がけである事を理解していない状態のまま、放っておくわけにはいかないのは分かるでしょう？」

マミの言葉にキツカが返していく。

「どちらにしても、彼女らが無力な一般人である以上、危険なことは変わりません。」

「友達が心配なのは分かるわ。でも、必要な事よ。何も知らないまま魔法少女になれば、絶対に不幸になる。」

マミが言い終わると、部屋を沈黙が包み込む。お互いの顔を見つめあう二人の間に緊張が走る。一方、当事者たるまどかとさやかは、二人の空気に口出しすることが出来ない。

しばらくその状態が続いたが、やがてキツカがあきらめたようにため息をつくと、口を開いた。

「……なら、期間を決めませんか？命がけである事を伝えるのに、いつまでも引つ張りまわす必要は無いと思いますけど？」

渋々、と言った様子ではあったが、妥協案を示してくるキツカにマミが考え込む。

「そうね、確かにいつまでも連れまわす訳にはいかないわね。分かったわ。じゃあ、いつまでにしましょうか？」

「じゃあ、明後日まで。私としてはそれ以上は認められませんね。もちろん私もついていきますけど、問題ありませんよね？」

「……ええ、問題ないわ。明後日までね。」

数泊置いてからマミが返す。マミの回答に緊張が和らいだのを感じ取ったのか、まどかとさやかが「ほっ」とため息をついた。

「そういう事になったけど。鹿目さん、美樹さん。構わないわよね？」
「い、いえいえ！全然かまわないですよ！むしろこっちがどういこう言える問題じゃないですし。」

「私としては、今すぐ辞めて欲しいぐらいなだけだね。」

マミの言葉に恐縮しながらもさやかが答え、キツカが一言漏らす。

「じ、ごめん。キツカちゃん……」

「……まどかが謝る事は無いよ。踏み込むか否かを決めるのは私じゃない。踏み込んで後悔されるのがいや、と言うのは私も同意見だし。

……出来ればこんなことに関係を持ってほしくなかったけど、今更言ってもしょうがないし。」

キツカは若干諦めのニュアンスを含んだ言葉を吐いて、三度コップを傾けて空にする。

と、ここでマミが右手をキツカの前に差し出してきた。

キツカはその手を見て、マミの顔に視線を移すと、彼女の意図する所を掴んだ。

「とりあえず、これからよろしく。秋水さん。」

「……ええ、よろしくお願いしますよ。巴さん。」

そう言って、キツカはその右手を自らの右手を差し出して握り返した。

「さて、じゃあ何から話すべきか……」

キツカの部屋。そこには現在三人の人間が部屋の真ん中の机を囲っていた。

一人は細めのピンクのリボンで髪の毛を二つにまとめている少女、鹿目まどか。

もう一人は短髪で、黄色の二つの髪留めがアクセントとなっている少女、美樹さやか。

最後の一人は、日本人らしからぬ金髪の髪を、青いヘアゴムで短めのポニーテールにまとめている少女、秋水キツカ。

バマミとキュウベエの姿は、そこには無い。既に話すことも無くなった事や、一人暮らしであるが故に、夕食の準備をしなければならなかった事から、本日は一旦解散する事にしたからだった。

……そう、会談は既に解散していた。しかし、では何故まどかたちがこの部屋に残っているのか？と言つと、解散の直後キツカがこんな事を言ったからである。

「ちょっと、二人だけで話をさせて欲しい。」

本日の会談。その殆どは、バミとキツカの間で言葉が交わされたのみで、キツカとその友人二人がゆっくり話すようなことは、あまりなかった。出来れば、彼女らともゆっくり話す時間が欲しい。と言う理由からだった。

特に門限も定められている事も無かった二人は、その言葉に乗ってこの部屋に残ることにした。彼女らもまた、キツカと話しておきたいと思っていたからだった。

そして現在。新たに注がれたジュースを載せた机を囲んで三人が向かい合っている。キツカの一言の後に言葉をつづけたのはさやかだった。

「いやー。にしても、ここ最近色々な事が起こりすぎて、さやかちゃん

は大パニックですよ。」

さやかがおどけたように言う。

魔女と魔法少女に初遭遇したのが、二日前。さらに、その非日常に踏み込めるということまで言われ、さらに今日の出来事である。

よくよく考えてみれば、この数日で彼女らの認識する世界は大きく変わったと言わざるを得ないだろう。

「まさかキツカちゃんも魔法使いなんて、全然気づかなかった。」

「出来れば魔術師と呼んでほしいね。そっちの方がカッコいいし。」

まどかの言葉に笑いながら返す。その笑みは完全にいつものキツカと同じ物だった。

「そう言えばキツカ。私たちになんか魔法掛けててみたいけど、どんな魔法掛けてたのさ?」

先ほどの会談では、ついぞ話題に上らなかったことを聞くさやか。まどかも「そういえば……」とつぶやきながらキツカの方を向く。終始このことが話題にならなかったことから失念していたらしい。

「魔法?……ああ、あれね。まどかたちが命の危険を感じると私に伝わるって魔法だったんだけど……」
「ごめん、不安にさせたかな?」

「うーん……思ったよりしょぼいねえ……」
「や、さやかちゃん……」

あっさり告げられた内容は、どうやらさやかにとっては少々拍子抜けな内容だったらしい。しかし、流石にこの発言にはまどかもあきれているようだ。

「仕方ないでしょ。アンタらに気づかれないようにしてしまおうよ。」

それぐらいの事しか出来ないんだから。……というか、どんなのを想像してたのよ。」

「えーと、何かすごくそんなバリア張ったりとか!」

『何か』ってなんなんだよ!」

さやかという言葉に、その場の三人が笑う。その様子は、完全にいつもの彼女らの風景と、何ら変わる事は無かった。

しばらくそんな益体も無い話をしていると、キツカが雰囲気を変えて「ところで」と、切り出した。

「……まどかたちは、どうするつもり?」

キツカという言葉に、残る二人の様子も、若干真剣な物へと変わる。「どうするつもり」とは、言うまでもなく決まっていた。魔法少女になるか否か、と言う事に他ならない。

まどかは数刻押し黙ると、遠慮がちに口を開いた。

「……やっぱり、キツカちゃんとは反対なんだよね?」

「当然。出来れば『魔法』の『ま』の字も知ってほしくなかったし、関わってほしくも無かったけどね。」

キツカという言葉に、まどかが恐縮する。だがその言葉に諦めの要素が混じっているのは、すでに巻き込まれてしまっている以上、今更こんなことを言っても詮無い事である、と言う事なのだろう。

「キツカが私たちを巻き込みたくなかった理由って、やっぱり危険だから?」

「それもあるし……魔法少女、と言う物が胡散臭いから、かな?」

キツカの口にした思わぬ言葉に、二人は驚く。そして、その言葉に

いち早く反応したのはさやかだった。

「それって、ママさんが私たちに嘘をついてるって事？」

「あー、言い方が悪かったね。正確に言うと、魔法少女と言う仕組みそのもの……もっと言うなら、キュウベえが胡散臭い、と言う事かな。」

「それって、どういじ……？」

キツカの訂正に、まどかが問う。確かに先ほど、キツカがキュウベえから説明を受けた時に、キツカはかなり懐疑的な態度をとっていた。だがまどかには、そのような態度の理由が未だに分からなかった。

「まず言いたいのは、私達を魔法少女にして、魔女と戦わせて……それで、キュウベえは何を得るの？っていうお話。」

「何を……得る？」

「もっとはっきり言うなら、『目的はなんだ？』って事。」

キツカの言葉を反芻するまどかに対して、キツカははっきりとした答えを出す。だがその答えにさやかは異を唱えた。

「それは、魔女を倒す事じゃないのかな？ほっとくと人に危害を加えるみたいだし……」

「なんで？確かに魔女は人間には迷惑だけど、キュウベえたちにとってはどうなのよ？」

キツカの言葉に、さやかは一瞬押し黙る。だが、すぐにその口を開いた。

「きゅ、キュウベえにも襲つからじゃないの？」

「だったら最初からそう言っていてもいいはずだよね？『僕たちを助けて』とか何とかとでも言ってるよ？」

「そ、それは……」

今度こそさやかが沈黙する。どうやら事のおかしさに気づいたらしい。キツカが言葉を続ける。

「そ。私たちが魔法少女にして、魔女を倒させても、キュウベえには何の利益も入ってこないのよ。少なくとも、キュウベえの話を聞く限りは。」

魔女がキュウベえにとっても害悪となる存在であったならば、まだ信用できたかもしれない。が、結局最後までそのような話は聞かれなかった。また、話を聞く限りでは、キュウベえに入る物は何一つとして存在しない。つまり全く目的が見えないのだ。キツカとしては、そのような存在の言葉を信じろ、と言う方が無理だった。

キツカの言葉に考え込む二人。だがキツカがキュウベえを信用していない理由は、これだけではなかった。

「それから……『どんな奇跡だってかなえる』ってという言葉。正直さっきのよりも、こっちの方が理由としては大きいかな?」

魔法少女の契約。その最大の売りたるそれを疑問視した言葉が、キツカの口から飛び出す。だがこちらに関しては、二人も内心思っていたことなのだろう。さほど大きな驚きを呼ぶことは無かったようだ。

「まあ、確かにそれは胡散臭いけどな。」

「でもキツカちゃん。مامィさんは願いをかなえてもらって魔法少女になったんだよね?もしキュウベえが嘘ついてたら、مامィさんが言ってくれると思うんだけど……」

バママミは基本的に善良な人間である。と言うのがキツカの彼女の

見立ててであった。二人を魔法少女に誘導しているような気は多少見られるものの、騙すようなまねをする事は無いだろう。その事を考えれば、確かに契約は履行され、彼女の望みは果たされたのだろう。……だがそうだったとすれば、キツカにとってはさらに理解できない事態となるのだ。まどかの問いにキツカが口を開く。

「……もし本当になんでも叶うんだとしたら、本当にそれこそいよいよもって胡散臭くなるんだよね。」

「まじいしつとっ。」

さやかへの反応に、キツカが続けていく。

「これは魔術を扱う者としての見識になるんだけどさ……なんでも叶う道具、めんどくさいから纏めて『願望機』って呼ぶけどさ。これを用意するのって、普通すさまじい時間と労力を要するのよね。」

「願望……機。」

まどかがキツカのことを反芻する。

「一例を挙げると……ある願望機は、再現不可能とまで言われる複雑な魔方陣を敷いて、その上魔力の濃い土地で六十年間も魔力をため続け、その上でもう一つ大きな儀式を行った上で、やっとたった一回分の願望機として機能するような物だったりするからね……」

「六十年……うわぁ……」

「それだけして、一回だけ……」

キツカの語るあんまりな内容に、絶句する二人をよそに、キツカはかまわず続けた。

「ちっきの『目的が分からない』って言う話にもつながるけどさ。そんなものを私たちに使わせて、一体何を待っているのか全く分からない

い、っていつのはかなり怖いと思わない？ 奇跡なんてそう起こせる物じゃない事を考えれば、『知らない間にとんでもない対価を支払う羽目になってました』とかありそうで……」

「……それって、キュウベえが私たちを騙そうとしてる、ってこと？」

さやかがキツカ of 言葉を受けて口を開く。それに対して、キツカはコップを傾けてから数刻考え込む様子を見せた。

「……正直、分からない。多分、本人に聞いても素直に答えとは思えないし。ただ、まだ何か喋って無い事があるのは、確かだと思う。」

部屋を沈黙が包む。与えられる奇跡と、命がけの戦いとで、一通りの実利とリスクが示されていたつもりになっていた。が、「奇跡」と言う物はそんなものでは釣り合わない物らしい。その事を頭にとめて、また改めて考え込んでいるようだった。

「……もうそろそろ、解散した方がいいかな？」

キツカが窓の外を見て、口を開く。空は既に闇色に染まり、幾ばくかの星が見え始めていた。

時計を見ると、時間は既に8時を過ぎてている。随分と長い間話し込んでしまっていたらしい。

「ん。そうだね。」

「もうこんな時間……」

二人も随分長く話し込んでいたことに気づいたようだ。時計を見ると荷造りを始める。

「予定より遅くなっちゃったね。」

「早く帰った方がいいんじゃない？」

「そうする。」

そんな会話をしながら、二人は立ち上がると、ドアの方へと向かっていく。

「じゃあまた明日、学校で。」

「また明日。」

「……………さやか。」

ドアを開け、別れの挨拶をするさやかを、キツカは呼び止める。だが、彼女はそれ以上口を開こうとしない。

「どうしたの？キツカ。」

「……………いや、なんでもない。また明日。」

「う、うん。」

だが、結局キツカは何も言わずに別れのあいさつを済ませた。さやかは少し気になった様子だが、そのままドアを閉じて出て行くのだった。

二人が出ていき、部屋にはキツカだけとなる。彼女は立ち上がるとそのままベットにあおむけに倒れこんだ。

彼女が最後に口にしようとした言葉。その原因は、昨日のさやかの発言であった。

「何で……………私達なのかな……………？」

「不公平だと思わない？こーゆーチャンス、本当に欲しいと思っている人は他にいないはずなのにね……………」

何故、昨日あの場に居なかった彼女が、この言葉を知っているのか？と問われれば、曉美ほむらに対する調査の一環のせいであった。理由こそ不明ではあったものの、彼女がまどかに執着しているのは確かである。であるならば、まどかにも監視をつけておいた方がいい、という判断からまどかをその日一日中監視していたのだ。故に、昨日の屋上で交わされた会話は、当然把握していた。

キツカは仰向けのまま天井を見つめながら、思考をめぐらせる。

(確かに、不公平だ。そういうチャンスが欲しがってる人間は、他にいくらでもいるだろうさ。……でもね、さやか。)

そこに居ない人物に向かって、呼びかける。キツカはそのまま口を開き、

「この世界は、いつだって不公平で、不平等だ。」

先ほど言えなかった言葉を、虚空に投げた。

第五話「帰ってきてくれるよね？」

全面ほぼ黒一色の空間で、その主に幾筋かの光が走る。

「ギャアアアアアアアアア！」

犬のようなその体にその光が突き刺さり、棘だらけのその頭をより一層刺々しい物にしながら喚く。だがその光を放った当人は特に気にした様子もなく、動きの止まったそれにめがけて、銀色の銃口を向けると、

「落ちろ。」

先とは比べ物にならない強烈な閃光が、ソレの頭を体の一部ごと大きく削り飛ばした。

「一丁上がり、っと。」

結果が解け、元に戻った街灯の点いた暗い公園で、キツカは銃口の煙を吹き消すと、周りに浮いていた剣を消し去った。

「お見事。」

「どうも。」

と、少し離れた所に居たバマミが、賞賛の言葉を投げかける。結果が解けるとともに変身は解いたようで、見慣れた見滝原の制服で近づ

いてきた。まどかとさやかも一緒だ。

ここで、キツカの装いも光と共に変わる。黒コートから、見滝原の制服へ。そして先ほどまで手にしていなかった小さめの青い鞆が出現すると、その取っ手を掴んだ。

「変身できるんなら昨日もそうしてれば良かったのに。何でわざわざ衣装なんて用意してたのさ。」

「魔力で一から作るのと、そこにある物を強化するのと。どっちが楽だと思っ？」

さやかの言葉にそう返しながら、キツカはリボルバーから弾倉を振り出すと、シリンダーの先についている「エジェクターロッド」と呼ばれる棒を押し込んだ。すると、ムーンクリップで繋がれた六発分の空薬莖が、シリンダーから排出される。

「リボルバーって一発一発薬莖を抜いて、また一発一発込め直してっと思うってたんだけど。実際は違うのね。」

「爆発の熱と圧力で、薬莖はシリンダーにへばりつきますからね。この棒を押し込むのだって結構固いんですよ？」

排出された薬莖六個セットを鞆の中に入れると、今度はクリップで固定された六つの実包を取り出してシリンダーに放り込む。そしてそのまま振り戻して、今度はリボルバー自身を鞆に詰め込んだ。

「グリーンフィード、落とさなかったね。」

「今のは魔女から分裂した使い魔ではないからね。グリーンフィードは持ってないよ。」

魔女退治の報酬が現れなかったことに対するまどかのコメントに、キュウベえが補足する。

「魔女じゃなかったんだ。」

「ん？もしかして使い魔単体は、今日が初めて？」

「ううん。ただ、ちょっと大きかったから魔女かな……なんて。」

キツカの問いに、まどかははにかみながら答える。確かに今倒した使い魔は、昨日の二体に比べればかなり大きかっただろう。ただの一般人であるまどかがそう思うのは無理もない事である。

「……と言う事は、はずれかあ。」

「使い魔だって放っておけないのよ。成長すれば、分裂元と同じ魔女になるから。」

さやかという言葉に反応して、マミが口を開く。彼女の言う「成長」の方法とは、いわゆる「人食い」である。その事でも、彼女には使い魔を放っておくわけにはいかなかった。

「所で、秋水さん。他に魔女はいそう？」

「ん……南の方に行った『使い魔』から、ちょっと反応を感じるけど。正確な位置は、全然ですね。」

先ほどと同じ単語。だが、与えられた意味は、先ほどの物とは大きく違っていた。

キツカが今、「使い魔」と言ったのは、彼女の操る小型の傀儡の事であった。その姿は、小鳥、ネズミ、蝶など様々な物があり、またキツカの思うとおりに動き、またそれが見聞きした物は全てキツカに伝わるようになっていた。先日の暁美ほむらの調査や、まどかの監視にも利用していた物である。

キツカは基本的に、これらの「使い魔」を街中にはら撒くことに依って、魔女や、その手下の使い魔を探索することが主であった。

「じゃあ、南の方に行きましょっか。」

「ええ、そうしましょう。」

キツカからの言葉を聞いて、ママが次の場所へと歩き出す。残りの三人も、その背中についていった。

「二人とも何か願いごとは見つかった？」

しばらく歩いたところで、ママが二人に問いかける。キツカにはその言葉に、ほんの少しだけ期待の色が混じっているような気がしたが、口には出さない。

「んー……まどかは？」

「うーん……」

まだ何も思いつかなかったさやかが、まどかに話を振る。が、彼女もやはり何も思いつかなかったらしい。やはりまどかも口ごもるばかりで何も答えなかった。

「奇跡」はそう軽いものではない、と言うキツカの言葉の事もあった。が、彼女らには何より、命がけの戦いに身を投じてでも、叶えないような願いが無い。と言う事の方が大きかった。

全く思いつかない様子の彼女らを見て、ママが口を開く。

「まあ、そういうものよね。いざ考えろって言われたら。」

「……と言つより、無い方がいいんだよ。命を懸けてまで叶えたい願いはないわ。」

ママの言葉にキツカが続ける。口調こそ砕けた物だったが、その言葉にはどこか強い重みがあるように思えた。

少しの間の沈黙。歩みを止める事も無く続いたそれを破ったのは

まどかだった。

「……マミさんは、どんな願いごとをしたんですか？」

まどかには、ついぞ思いつく事は無かった命がけの願い。しかし、バママミは魔法少女である。それは、確かに何かを祈り、戦いの運命を受け入れたと言う事に他ならない。それだけ分ければ、当然のように浮かぶ疑問だった。

その問いを受けたマミの足が止まった。先頭を陣取っていた彼女が止まったことで一行の行進も止まる。

「いや、あの……どうしても聞きたいってわけじゃなくて……」
「私の場合は……」

どうやらまずい事を聞いたらしい、と感じたまどかがあわてて繕おうとする。だがマミは、まるで何かを眺めるように空を見上げるばかりであった。

「考えている余裕さえなかった、ってだけ。」

視線を正面に戻すと、マミは左腕を目の前に掲げる。視線の先には、指輪に形を変えた彼女の契約の証がそこにあった。

「後悔しているわけじゃないのよ。今の生き方も、あそこで死んじゃうよりはよほど良かったと思ってる。でもね、ちゃんと選択の余地のある子には、キチンと考えたうえで決めてほしいの。」

「……私にできなかったことだからこそ、ね。」

バママミにどんな出来事が降りかかったのかは、分からない。だが理不尽な理由で巻き込まれたのであろう彼女は、それを見返してなお微笑んでいた。

その微笑みに、言いたい事もあったであろうキツカも沈黙を守ったまま語ろうとはせず。またまどか達も、その言葉を最後まで黙して聞き届けるのだった。

あれから一行は、一体の使い魔を倒した後、この日の、魔法少女体験コース、は終了する運びとなった。

帰宅後、その日の諸所諸々を済ませ、後は寝るだけとなったまどかが、寝間着でベッドに横になる。

「……やっぱり簡単なことじゃないんだよね。」

「僕の立場で急かすわけにはいかないしね。助言するのモルール違反だし。」

さあ、これから寝よう。と、思っていたタイミングで現れたキュウベえに声をかける。帰ってきた言葉はつれない物だったが、まどかもまた「キュウベえらしい」と感じて苦笑するだけだった。

「ただなりたい、ってだけじゃダメなのかな？」

うつかりこぼれ出たように出た言葉。その言葉にキュウベえが反応する。

「まどかは、力そのものに憧れているのかい？」

「いや、そんなんじゃないかって。うん……。そうなのかな。」

とついに否定しようとするも、やはりその言葉を肯定する。まどかは、キュウベえの言うとおり、確かに力そのものにあこがれていた。

そのままキユウベえに向かって語りかける。

「私って鈍くさいし、何の取り柄もないし……だからママさんやキツカちゃんみたいに、カッコよくて素敵な人になれたら、それだけで十分に幸せなんだけど。」

……昨日、キツカに言われたことを忘れたわけではない。「奇跡」と言う物は、決して軽くは無いという言葉。まどかには、戦って欲しくは無いという言葉。

だが、彼女はそれ以上に焦がれていた。誰かを守るために戦う、彼女らに。そのための力に。そして何より、その有り方に。

鹿目まどかは役立たずだ。言い方は悪いが、これがまどかの自分自身への評価の大意である。誰の役に立つことも出来ず、ただただひたすら周りに迷惑をかけるだけの存在。

だが、彼女らは違った。バママはこの街を護るために戦い、キツカもまた、ああは言っているものの、誰かの助けになっていることは確かだ。

そんな彼女らが、「役立たず」なまどかにとって、非常にまぶしいものとして映り、またそれらに羨望を抱くのは、もはや必然であった。自分もあなりたいたいと、そういうふうになりたいと。

故に、彼女の望みは、彼女の思う幸せはそれだった。何かをなせるだけの力が。「役立たず」の自分から、彼女らに追いつけるだけの力が。欲しい、と。

「まどかが魔法少女になれば、ママや、キツカよりずっと強くなれると思っよ。」

「えっ？」

そんなまどかの気持ちを知ってか知らずか、キュウベえが思いもよらぬ言葉をかけてきた。そのまま続けて口を開く。

「もちろん、どんな願い事で契約するかにもよるけれど。まどかが産み出すかもしれないソウルジェムの大きさは、僕にも測定しきれない。「これだけの資質を持つ子と出会ったのは……」

「あはは、何言ってるのよもう……嘘でしょうっ？」
「いや……」

彼なりの励ましのつもりだと受け取ったまどかが、その言葉をさえぎる。キュウベえも何か言おうとしたが、聞く耳を持つとしない様子を悟ったのか、それ以上口を開く事は無かった。

少ししゃべったことでのどが渴いたまどかがベットから立ち上り、部屋のドアに向かう。

……その足取りが、まるで逃げるようなものだったことに、その場にいる者が気づくことは無かった。

「……それで、何の用かしらっ？」
「……」

夜の公園。既に今日の、魔法少女体験コース、は解散し、各々が帰路に就いた頃。バマミと、暁美ほむらが、街灯に照らされたそこで相対していた。

「あしたで、彼女たちを連れまわすのは終わりにするそうね。」

「……ええ、そうよ。秋水さんから聞いたのかしら？」
「今日の昼休みにね。」

ほむらからの確認に、マミの声のトーンが少し落ちる。

「それがどうかしたのかしら？これは、私と秋水さんとの間で既に決めたことよ。あなたには関係のない話だとおもっただけだよ。」

「ええ、そうね。本音を言えば、今すぐにでもやめてほしかったけど。どちらにしろ明日で終わるのだし。そのことについては何も言わないわ。」

マミが怪訝な顔になる。何か文句があるとすれば、この事だろうと思って口にしたのだが、そうではなかったらしい。

では何故このタイミングで話しかけて来たのか。マミには皆目見当がつかなかった。浮かんだ疑問をそのまま投げつける。

「……そう。じゃあ、何の用で話しかけて来た訳？」

「……この件が終わった後、もう彼女達に関わらないで欲しい。」

思わぬ言葉にマミが目を見開く。だが、当然そんな要求はのめる筈が無い。即座にマミが言い返す。

「どっぴいつつもり？人付き合いであなたにどっぴい言われる筋合いは無いと思っただけだよ。」

「あなたは二人を魔法少女に誘導している。無関係は一般人を巻き込もうとしないで。」

「無関係じゃないわ。彼女達はキュウベえに選ばれた。それに、魔法少女になるかどうか決めるのは、私たちじゃなくて彼女達よ。……それとも、彼女達が魔法少女になって、グリーンフィードの取り分が減るのが不満な訳？」

「そんな事に興味は無いわね。勝手な事を言わないでもらえるかしら

「？」

向き会う両者が互いににらみ合い、沈黙する。誰もいない夜の公園に、一触即発の空気が流れる。

数刻の間。ママがその沈黙を破って口を開く。

「……分からないわね。あなたの目的は一体何？ はっきり言わせてもらうけど。あなたの行動は矛盾だらけよ？」

キツカの話だと、ほむらは戦力を求めているらしい。だが実際の行動はどうだろうか？

まず、先ほどまでのやり取りでも分かるように、まどかとさやかが魔法少女になるのを嫌がっているようだ。だが、どのような相手を想定しているかは分からないが、戦力を欲しているなら、魔法少女の数は多いに越したことはないはずである。

その上、バママとは協力するどころか、敵対するような行動までとっている。とてもではないが、戦力を欲している人間の行動とは思えなかった。

「矛盾なんてしてないわ。私は、私の目的のために、常に最善の行動をとっているつもりよ。」

ほむらがママの問いに言葉を返す。だが、あくまで目的を答えるつもりは無いらしい。尚も睨み合いは続く。

「……いいわ。どちらにしても、私はあなたを信用できない。秋水さんはどういふ訳か信用しているようだけど、私には無理よ。」

そうママが言い放つ。その言葉は、宣戦布告とほぼ同一のニュアンスが含まれていた。

「……貴女とは、戦いたくないのだけれど。」
「なら、一度と会うことのないよう努力して。話し合いだけで事が済むのは、きつと今夜で最後だろうから。」

ほむらに付き放つように言葉をぶつける。どうやら、これ以上の話し合いの余地は無いと判断したらしい。取りつく島も無し、とはまさにこの事だろう。

そのままマミはほむらに背を向けて歩いていく。ほむらはしばらくその背中を見送った後に、反対方向に歩き出した。

11月29日、火曜日、午後1時ごろ。

キツカ、まどか、さやかの三名は、見滝原中学校の屋上に陣取っていた。昼食は既に終え、志筑仁美は委員会の関係で、ここにはいない。

「魔法少女体験コースも今日で終わりかあ。」

「え？あれってそんな呼び方してたの？」

「キツカちゃん知らなかったの？」

さやかの一言に反応するキツカ。相当軽い名前を付けられていた事に苦笑する。

「仮にも命に係わる危険な事なのに、軽すぎでしょ。」

「あははは、ごめんごめん。……って、別に私が言い出した訳じゃ無いじゃん！なんであやまってんだろ？」

「……………」

「……ん？まどか、どうしたの？」

キツカの言葉にさやかがふざけながら返す。楽しそうに笑う兩名だが、まどかが反応しなくなってしまった。様子が変わったことに気づいたさやかが声をかける。

「……………キツカちゃん。」

「何？」

「……………キツカちゃんは、さ……………怖くないの？ 魔女と、戦うのが。」

突然の質問に、虚を突かれたようだ。キツカは驚いた顔でまどかの方を見ると、数刻おいてまどかに口を開く。

「……………怖くないように、見えた？」

「……………うん。昨日も、すぐく堂々としてたから……………」

バマミもそうだったが、この数日で見えた戦う彼女らは、とても堂々としたものだった。どんな敵であるかと倒して見せる、と言わんばかりのその姿は、何も怖いものなどないのではないかと錯覚させられるほどであった。

だが、彼女にはいくら考えてもあり得なかった。自分がどれだけ大きな力を持っていようと、決してそのようには立ち向かえる自分が想像できなかったのだ。

「……………怖くないか、か。」

キツカはまどかから視線を外すと、空を見上げた。目を細め、何かを思い出し、懐かしむようなその表情を、まどかはただ黙って見つめる。

「……………普通なら『怖い』と答えるべきなんだろうけど。それじゃあ、嘘になっちゃっね。」

「……え？」

「怖くない、と言えは語弊はあるかもしれないけど、そうだね。」

穏やかにそう言ったキツカは、相変わらず何かを懐かしそうに眺めていた。非常におだやかな様子だがまどかの内心はそれどころではない。

確かに、まどかには自分が堂々と魔女に立ち向かっている図は浮かばなかった。だが、それでも、その堂々としていた彼女らも、多少なりとも恐怖と共に戦っていると思っていた。

だが、それは間違いなのか？ただ、私が臆病なだけなのではないか？と言ふ思考がまどかの頭を駆け抜ける。

「……多分、怖くないと思うのは、私がおかしいだけだと思うよ。」

キツカの声にまどかが顔を上げる。どうやらいつの間にか、顔を下げたままにいたようだ。

相変わらず空を見つめたままだったが、まどかに向けて言葉を続ける。

「魔術を得てからさ。ホント、『色々な事』がありすぎたせいかさ、怖くないのよ。私の倒せる魔女も。そして多分、私がどうあがいても倒せないであろう魔女も、さ。」

「え？」

キツカのこの言葉は、まどかに先ほど以上の衝撃を与えた。

どうあがいても倒せない……つまり、どうあがいても相対すれば死ぬと言ふ相手、と言ふ事である。それが本当の事なら、彼女は……

「それって……死ぬのが、怖くないって事？」

そう、彼女は死をも恐怖していない、と言う事になってしまっただけだ。彼女の言う「色々」とは何なのか、まどかには分からない。だが、そのせいで死をも恐怖しなくなったというのなら、一体どれほど凄絶な体験だったのか。まどかには全く見当がつかなかった。

「うーん……死ぬのが怖くない、と言う訳じゃ無いね。これはただ……神経が擦り切れちゃってるだけなんだと思う。」

だが、そんな単純な事と言う訳では無かったようだった。よくわからない、と言う顔をしているまどかにキツカは続ける。

「確かに、死ぬことは怖い。だから、命を狙ってくるような敵と戦えば、誰だって怖がる。でも、いちいち怖がってたら戦ってられない。だから、命を懸けて戦う人間っていうのは、その恐怖を大なり小なり押さえつけながら戦ってる物なのよ。」

でも、いつからだったかな？どんな敵と戦ってもさ、何故か怖さを感じなくなっちゃったのよ。多分、戦ってる内にまともな神経を擦り切っちゃったんだと思う。命を狙ってくる相手を恐怖できないって、明らかにまともじゃないでしょ？」

さびしげな顔で、キツカは尚も語る。

「痛みを感じない人間って、ものすごく脆いんだ。何故かって、自分が致命的な傷を負っていても、気づけないから。負っていたとしても、そのまま気づかず進めちゃうから。」

それと同じように、私は敵からの恐怖を感じれない。だから、どんなに相手が強くても突っ込んで行けちゃう。……いわば、壊れた暴走特急みたいな物、かな。」

死ぬのは、怖い。だが、戦いの中で恐怖を感じる事が出来なくなってしまう。その結果、どんな敵でも構わず突っ込めてしまう。それ

がキツカの「怖くない」と言う言葉の意味であった。

「そんなの、とてもじゃないけどまともじゃない。だから、私なんかと、まどかを比べる事なんて出来ないよ。」

さみしそうな顔で、そう締めくくる。キツカは語り終えたが、誰も口を開こうとしない。沈黙が屋上を包み込む。

確かに、まともではない。恐怖を恐怖と感じられなくなるなど、一体どんな経験を積みせばそんな事になるのか。まどかには皆目見当がつかなかった。

「死なない……よね？」

「え？」

まどかが小さくつぶやく。その言葉が意外だったのか、空を見上げていたキツカの顔が、まどかの方を向く。

「キツカちゃんは、死なないよね？生きて、帰ってきてくれるよね？」

キツカの目線の先には、酷く不安げなまどかの顔があった。最も、それはある意味当然かもしれない。自分の友人から、そんな言葉を聞かされれば、誰だって不安になるだろう。

それに対してキツカは笑いかけながら口を開いた。

「大丈夫。そう簡単に死ぬ気は無いし、負けるつもりはない。戻ってくるよ。きちんと、ね。」

その言葉に嘘偽りはない。そう思わせるような声が、屋上に響いた。

午後4時、30分ごろ。

まどかは見滝原市立病院のロビーに立っていた。理由は例のごとく、上条恭介のお見舞いに行ったさやかへの付き添いである。今日はキユウベえにも一緒だったが、今日は一人でいたいという気分だったこともあり、さやかと共に恭介の所へ行って貰っている。

尚、キツカはこの場にはいない。いつもならさやかの面会中、まどかの話し相手となっていたのだが、今日は学校が終わるとまっすぐ家に戻ってしまった。理由は、今日最終日の、魔法少女体験コースの準備らしい。

……最も、準備と言っても、いつものあの銀色の銃をどうこうするだけらしいが。

(そう言えば、あの銃。どこで手に入れたんだろう?)

キツカの戦闘スタイルは、基本的にあの異様に大きな拳銃に、魔法で出現させた剣によるものだった。

剣の側の使い方は、主に二通り。空中に浮いた剣を動かして切りつけるのと、剣を射出してぶつけるのと、である。

空中に浮いた剣を動かす、と言っても制約はある。基本的に動かせるのはあの光の環の付いたものだけらしく、また動かせる範囲もキツカを中心に半径約二メートルの範囲のみ。また一度でも制御を外れた剣は、もう操作する事が出来ず、新たに剣を光の輪から作らねばならないとか。

そんな制限がある故か。使い方としてはどちらかと言つと、後者の方法が圧倒的に多かった。最もそれすらも、光の輪が付いている、つまり制御下にある物しか射出できないそうだが。

また彼女が剣を射出する方法も独特である。数本の剣を、それぞれのタイミングをずらしながら射出するのだ。理由としては、それぞれの光の輪が、剣の射出・再生成をタイミングをずらして行う事で、一種のマシンガン効果を得ているのだとか。確かに出てくる使い魔を次々礫にしていくそのさまは、まるでマシンガンのようだったと思う。

そして、あの銀色の銃。拳銃としては異様な大きさを誇るそれは、先ほどまでの剣とは違い、魔力で作り上げられたものではないらしい。理由を聞いたのだが、どうやら魔力で作られただけの銃では、使用する弾薬の威力に耐えられなかったからだという。

使用している弾薬の規格は、現実に存在する「7・62×51mm NATO弾」という物をそのまま使っているらしい。が、問題はそれではなく、それに封じ込められていた魔力だった。

その威力は、見た目こそバママミのフィニッシュブローに比べれば若干地味だが、掠めただけで、体躯の大きな魔女の体を大きくむしり取るといってもない物だ。確かに生半可な強度では、銃の方が耐えられないだろう。

しかも、ただエネルギーを打ち出すだけでなく、任意に拡散させたり、収束させたり、時には榴弾にすらできたりと、結構な自由度を誇る武装らしい。この辺りの複雑な術式を、ただ魔力だけで再現するのは結構骨なんだとか。

時には魔女すら一撃で葬るような彼女の銃だが、何も無制限に撃てるわけではない。彼女はその銃弾を、最初から銃に込められてる分に加えて、クリップに留められた実包3セット、つまり計24発しか持ち歩いていない。最も、その威力を考えれば、それでも十分な気はし

てくるが。

(やっぱり、自作なのかな？でも銃って作るの難しそうだと思うんだけどなあ…………)

考え続けるも、全く分からない。そのような事を考えるには、まどかには銃の知識が致命的に欠けているのだ。当然である。

「お待たせ。」

と、物思いにふけっていると、さやかに声をかけられた。キユウベえも一緒だ。だが、見舞いに行っていたにしては、お早いお帰りである。一体どうしたのだろうか？

「あれ？上条君、会えなかったの？」

「何か今日は都合悪いみたいでさ。わざわざ来てやったのに、失礼しちゃっわよね。」

どつやら今日は会う事が出来なかったようだった。そんな愚痴を聞きながら、病院のロビーを出る。

と、病院を出てすぐまどかがその足を止めた、視線は病院の壁に固定されている。

「ん、ん？どうしたの？」

「あそこ。何か…………」

さやかも一緒に病院の壁を見る。この病院の壁は真っ白なのだが、一部分だけ黒くなっている。どこか不吉な色に変色した壁の中心には、何か…………

「グリーンフシードだ！孵化しかかっている！」

キユウベえが驚いたように声を上げる。グリーンフシード、それは魔法少女の間では報酬として扱われるアイテムであるが、根本的な所を言えば「魔女の卵」である。それが孵化しかかっていると云う事はすなわち、魔女が生まれかかっている、と云う事に他ならない。

「嘘……何でこんなとこに？」

先日のマミの言葉が蘇る。確か彼女はこう言っていたではないか？

「それから、病院とかに取り憑かれると最悪よ。」

「ただでさえ弱っている人たちから生命力が吸い上げられるから、目も当てられないことになる。」

「マズいよ、早く逃げないと！もうすぐ結界が出来上がる！」

「またあの迷路が？」

「キ、キツカちゃんを呼ぼう！」

そう言ってまどかが携帯を取り出す。電話帳を開いて、ほぼトップに出て来た「秋水橘花」の所を押すと、そこからさらに音声電話の項を押した。

早く出て、と焦りながら待つことスリーコール。無事彼女の携帯につながった。

『はいもしもし。まどk』

「キツカちゃん大変なの！病院にグリーンフシードが孵化しかかかってー！それでーえと、えと。」

『……………マジっしょっ！』

キツカという言葉さえぎって、まどかが叫ぶ。勢い余って言う事を言いきった事にも気づかずおろおろしていたが、大体の事は伝わったらしい。

だがキツカからの返答は、あまり芳しいものではなかった。

『……………「うめん、今すぐにはそっちに行けない。』

「え、どうして？」

キツカからの回答に驚くまどか。キツカが電話越しに続ける。

『今メンテナンスしてたから、銃はバラバラになっちゃってる。』

「そんなー」

『今すぐ組み立ててそっちに向かうから。まどかたちは結果ができる前に離れて。』

それから、近くにマミさんがいると思うから、探し出して連れて行って。多分そっちの方が早い。』

なんとというタイミングの悪さ、これが運命のいたざらと言っ物か、と思ったが、キツカの指示に頭が冷える。

「わかった。マミさん探してくる。」

『私も出来るだけ急いでいく。いい？絶対にその場にとどまろうなんて思わないでね？』

その言葉を最後に、キツカの方から電話を切る。恐らく銃を組み立てる作業に戻ったのだろう。

「さやかちゃん。」

「うん、大体聞こえてた。」

携帯をなおしたまどかがさやかの方を向く。会話の内容は大体聞

こえていたらしい。

「まどか、先行ってマミさんと呼んで来て。あたしはこいつを見張ってる。」

「そんな！でもキツカちゃんは。」

いきなりキツカの言いつけを破るような事を言い出すさやか。まどかが何か言おうとするが、そのままさやかは続ける。

「あの迷路が出来上がったら、こいつの居所も分からなくなっちゃうんでしょ？放っておけないよ。こんな場所で……」

あまりにも危険すぎる行為。だが、さやかの気持ちは容易に察することができただけに、まどかには説得することができない。

「まどか、先に行ってくれ。さやかには僕が付いてる。」

と、キュウベえが口を開く。

「マミならここまで来れば、テレパシーで僕の位置が分かる。ここでさやかと一緒にグリーンフードを見張っていれば、最短距離で結界を抜けられるよう、マミを誘導できるから。」

キュウベえからの提案。時間がない以上、さやかを説得することは無理だ。一瞬逡巡するが、まどかも決断する。

「ありがとう、キュウベえ。」

「私、すぐにマミさんを連れてくるから。」

そう言ってさやかに背を向けて走り出す。

先ほどキツカは、マミが近くに居る、と言った。何が根拠なのかは

知らないが、今はそれを信じるしかない。

そして、さやかから見えなくなった頃、あたりを結界が包み込んだ。

第六話「もう何も怖くない」

「じいね。」

11月29日、午後4時40分頃。

見滝原市立病院の前で、巴マミが確認するようにつぶやく。当然、鹿目まどかの姿もそこにあった。

先ほどの電話で、キツカは「巴マミが近くにいる」と言ったが、結局その言葉は正しかった。すぐ近くにあった公園で、何をすることもなくベンチに腰かけていたマミを捕まえて、此処まで連れてくるのに掛かった所要時間は十分を切っているのでは無いだろうか。

二人は壁を見つめる。先ほどまで壁に突き立っていた不吉な物体は既にそこには存在しない。だが、それはただグリーンフィードが病院の壁から、それ自身が展開した結界の中に身を移しただけであった。邪気を纏った魔力は、相変わらずそこにある。

マミは状況を確認するためにテレパシーを飛ばす。

(キュウベえ、状況は?)

(まだ大丈夫。すぐに孵化する様子はないよ)

まだ魔女が孵化していないという事は、周りへまだ被害は出ていないという事だ。キュウベえからの言葉に二人は一旦安堵する。

(さやかちゃん、大丈夫?)

(平気平気。退屈で居眠りしちゃいそう)

敢えてその場に残り、結界に巻き込まれたさやかも大丈夫そうである。余裕綽々と言った様子だ。

(むしろ、迂闊に大きな魔力を使って卵を刺激する方がマズい。急がなくていいから、なるべく静かに来てくれるかい?)
(わかったわ)

そう言ってテレパシーを終了すると、ママは左手を掲げる。指輪となっているソウルジェムが少し輝くと、結界の入口が出現した。

「さあ、行きましょつか。」

そう言って入口に足を踏み入れた。まどかもそれに続く。

結界の中は、やはりと言っつか、またかと言っつか。毎度の如く混迷を極めていた。

一面、お菓子だらけ。絵本に出てくるお菓子の家をスケールアップして、ダンジョンにしたような感じであるが、その中に医療用のベツトや注射器が見えたりと、実に節操がない。その上、どこもかしこも極彩色と言っべき配色で、実に目が痛い。

「魔女の結界って、こんなのはっかりなんですか……」

「あら、今更?でも、昨日秋水さんが倒してた使い魔の結界は、地味だったでしょ?」

少しげんなりしたようなまどかの発言に、ママは笑いながら答える。そう言えば、昨日キツカが倒した犬のような使い魔は、ただただ真っ黒としか言いようのない地味な結界だったような気がする。

そうして結界の中をしばらく歩き続ける。まだ本格的に魔女が孵化していないという事もあり、使い魔の姿は少ない。グリーンフィードを刺激しない為にママは変身していないので、数少ない使い魔に出くわしても、隠れてやり過ごしながら進む。

そここう進んでいるうちに、まどかが口を開いた。

「それにしても、間に合ってよかったです。」
「無茶し過ぎ……って怒りたいところだけど、今回に限っては冴えた手だったわ。」

まどかの言葉に笑いかけながら返すマミ。病院で発生した魔女は、甚大な被害を及ぼしやすい。それだけに彼女らの判断は、一概に間違っているとは言えない様子だった。

「これなら魔女を取り逃がす心配も……」

と、ここでマミが言葉を途切れさせ、足を止める。まどかは何事かと声をかけようとするが、その前にその原因について気づいてしまった。

「あっ……」

「……言っただはずよね？二度と会いたくないって。」

見滝原中の転校生にして、もう一人の魔法少女、曉美ほむらがそこに居た。グリーンフィードを刺激しないためだろう。彼女もまた、この結界内で変身はしていなかった。

「……今回の獲物は私が狩る。貴女達は手を引いて。」

実に簡潔な撤退要求を突きつける。だが、マミにそれを呑もうという様子は無い。

「そももいかないわ。美樹さんとキュウベえを迎えに行かないと。」

理由も明かさずにそのように言われても、要求をのめるわけがない。ましてやマミには引けない理由があるのだ、当然だろう。

だが尚もほむらは食い下がる。

「その二人の安全は保証するわ。」

「信用すると思ってる？」

ママミの左手の指輪が瞬くと、リボンが発生し、ほむらに向かう。どうやら実力行使に出るとは露とも思っていなかったらしい。ろくな抵抗も出来ずにそのまま拘束されてしまった。

「ば、馬鹿。こんなことやってる場合じゃ……」

「もちろん怪我させるつもりはないけど、あんまり暴れたら保障かねるわ。」

完全に予想外の出来事に、狼狽した様子のほむらに言い放つ。

「今度の魔女は、これまでの奴らとはわけが違うー！」

「おとなしくしていれば帰りにちゃんと解放してあげる。行きましょ

う、鹿目さん。」

「え……はい。」

ほむらからの警告を信用するつもりは毛頭ないらしい。声を上げるが、聞く耳を全く持たずとしない。まどかを連れてさっさと行ってしまっ。

「待つ……くっ……」

その身を縛るリボンから逃れようと身を擦る。だが彼女を拘束しているのは、ママミの願いが最初に形にした物である。そう簡単に解ける筈が無い。

結局今の彼女には、遠ざかっていく二人の背中を見送る事しか出来

ないのだった。

ほむらと遭遇してからしばらく経つが、相も変わらず結界は続いている。

グリーンシードを刺激しない為にゆっくり進んでいた、と言つのもあるが、結界そのものが大きいと言つ事もあった。

先ほどのほむらの「これまでの奴とはわけが違う」と言つのも、あながち嘘ではないのかもしれない。

そんな事を考えながら、まどかはママに続く。その背中が、これまでと同じく堂々とし、非常に頼もしいもののように見えた。

今日の昼の会話が蘇る。

「怖くない」「まともじゃない」と言った彼女は、とても寂しそう。今にも消えてしまいそうに思えたあの表情が、脳裏に浮かぶ。

「あの……ママね。」

「なあに？」

そんな彼女の様子を思い出してしまったまどかは、聞かずには居られなかった。今日の昼、キッカに向けた問いを、投げかける。

「ママさんは、怖くないんですか？ 魔女と戦ったりとか……」
「……鹿田さんは、怖くないと思つたの？」

一瞬黙り込んだが、問いを返す。その歩みを止めることなく、ママは続ける。

「もし怖くないと思っなら……」

「そうじゃ、ないんです。そうじゃ……」

ママミの言葉にあわてたように口を開く。が、すぐには言葉が続かない。

少しに間の間を置いて、やがてまどかが言葉を紡いでいく。

「……今日のお昼に、キツカちゃんに同じことを聞いたんです。『魔女との戦いが怖くないの?』って……」

「……………」

ママミはまどかの言葉に黙って耳を傾けている。彼女のその態度を受けて、まどかは続けた。

「そしたらキツカちゃん、『怖くない』って答えたんです。それも、ただ怖くないだけじゃなくって、『もう怖いと思う事が出来なくなっちゃった』って、言っただけです。『戦っているうちに、まともな神経を擦切らしちゃった』って……」

まどかの言葉に続きがあるのを察しているのか、相変わらずママミは沈黙を守っている。

「……………私って、昔から得意な学科とか、人に自慢できる才能とか何もなくて。」

きつとこれから先ずつと、誰の役にも立てないまま、迷惑ばかりかけていくのになって……それが嫌でしろうがなかったんです。」

自分に対する評価を語っていく。ママミから見ても、それは不当な評価のように思えたが、口には出さない。まどかが続けて口を開く。

「でもママさんと会って、キツカちゃんの事も知って。誰かを助けるために戦ってるの、見せてもらって……同じことが、私にもできるかもしれないって言われて。その事が、何よりも嬉しかったんです。こんな自分でも、誰かの役に立ってるんだって、胸を張って生きていけるんだって。」

でも、と言葉を続ける。先ほどまで上がっていた声のトーンも、大きく下がってしまった。

「……怖いんです。」

まどかの声が、若干震える。先導するママからは見えないが、まどかの顔が下の方を向き、口を開く。

「死んじゃうのも、魔女と戦うのも……怖いんです。でも、何より

……変わっちゃうのが、怖いんです。」

様々な言葉が、再び蘇る。

奇跡と言う物の、重さ。「まともじゃなくなってしまった」と、さみしそくに語るキツカ。

そして、そんな事を考える内に、思い出した、あの言葉。

「貴女は自分の人生が、貴いと思う？ 家族や友達を、大切にしている？」

「もしそれが本当なら、今とは違う自分になるうだなんて、絶対に思わないことね。」

「さもなければ、全てを失うことになる。」

もし、変わってしまったら。変わってしまったとすれば。致命的な、取り返しのつかない「何か」を、失うかもしれない。

そう考えると、まどかには変わることが怖くて仕方がなかった。

その場に流れる沈黙。相変わらず足は動いているが、口はそこで止まってしまっている。

やがて、ママがこぼれたように言葉を紡いだ。

「……………そう。秋水さんが……………」

意外そうな口調。やはり彼女にとっても、この言葉は意外な物のようにだった。少しの間を開け、再び口を開く。

「確かに、怖いよね。いきなり『なんでも叶えてあげる』とか、『命をかける』とか、『まともじゃなくなった』なんて言われたら。」

静かに、やさしく語りかけるように言葉を放っていく。

「えと、その……………ごめんなさい。やっぱり私って、弱いですよね……………」
「うっん、そんな事は無いわ。その恐怖は、人間ならだれでも持っている物。当たり前だから、気にしなくていいのよ?。」

まどかの恐怖を、当然の事と肯定したママは、少し考え込むように黙り込み、やがてゆっくりと、その口を開いていった。

「……………私は怖いわ。魔女と戦うのも、命を落とすのも。」

まどかの問いに、今改めて答えると、ママは言葉を続ける。

「そもそも、憧れるほどのものじゃないわよ、私。」

そう、ママは自嘲的に語っていく。その言葉に、先ほどまでの堂々としたものは無い。

「無理してカッコつけてるだけで、怖くても辛くても、誰にも相談できないし、一人ぼっちで泣いてばかり……」

命を掛けたとしても、それが誰かに評価されることもないし。死んじやっても誰にも知られる事も無い。……知ってる？ 結界の中で死んじやうと、骨も残らないのよ？」

まるで、これまで溜め込んで来た物が一気に決壊してきたようにこぼれ出ていく言葉。口調こそいつもと同じようだったが、まどかにはそれが悲痛な叫びであるかのように聞こえた。

「私は怖い。もし魔女に殺されて、『私が死んだ』って、誰も知ってくれなくて……みんなに忘れられていくと思うと、それが何よりも怖い。」

でも、誰もそれをわかってくれないし、知ってくれない。……いいものじゃないわよ。魔法少女なんて。」

彼女はこれまで、どれほどの孤独を抱えて来たのだろうか？

理不尽な理由で巻き込まれ。誰にも理解されず、また誰にも知られる事も無い戦いを、たった一人命を懸けて続けていく。

それがどれほど辛く、苦しい物なのか。まどかには全く分からない。

「……ママさんは一人ぼっちなんかじゃないです。」

「え？」

それでも、それがつらい事だという事は分かった。巴マミと言う人物が、どれほどの苦しみを抱えて来たのかは分からない。それでも、それが「苦しい」物だと言う事だけは理解できた。

「私が覚えてます、私知ってます！ さやかちゃんやキツカちゃんだっています！ きっと、ほむらちゃんも……」

「鹿目さん……」

「だから……だから……」

故に、まどかは口にしないている事は出来なかった。伝えずにいる事など、出来なかった。

……そう、巴マミは決して、

「マミさんはもう、一人ぼっちなんかじゃないです。」

幾たび目かの沈黙が流れる。いつの間にか、これまで止まることの無かった歩みも止まってしまって、先導をしていたマミはまどかの方に向けていた。

まどかから見たその顔は、今にも泣きそうで、「頼れる先輩」と言う仮面は、もうそこには無い。

「……参ったなあ。まだまだちゃんと、先輩ぶってなきゃいけないのになあ……やっぱり私、ダメな子だ。」

にじみ出た涙をぬぐいながら、マミが口を開く。

「そうよね。私は、もう……」

(マミ……)

その時だった。向かい合う二人の頭に、切羽詰まったキュウベエの言葉が突如として鳴り響く。

(グリーンシードが動き始めた！孵化が始まる。急いで！)

どつちやら、あまりゆっくりしている時間はもう無いらしい。二人が顔を見合わせる。

「オッケー、わかったわ。今日という今日は速攻で片付けるわよ！」

そう言い切るマミには、確かにもう取り繕ったための仮面は無い。

「マミさん。」

だが、だからこそ。

そのにこやかな表情は本物で、いつも以上に頼もしいものであった。

そしてマミは変身する。相手がほとんど目覚めている以上、隠れる必要はもうどこにもない。

「さあ、いきましょー」

「はい…」

(体が軽い……こんな幸せな気持ちで戦に臨めるなんて初めて。)

(もう何も怖くない。)

(私、一人ぼっちじゃないもの！)

赤く染まった空に、黒い影が疾走する。

立ち並ぶ家々の屋根の上を疾駆するそれは、まるで何かに追い立てられているかのような雰囲気を放ちながら前へ進んでいた。

(全く、なんでこんな時に限ってメンテナンスなんてしてたのかねえ！)

キツカが心の中でそう毒づく。

ただの銃を組み立てるだけなら、ものの数分で済んでいた。その程度なら、ママの到着より少し遅れたぐらいのタイミングで急行できただろう。

だが、彼女の愛銃は残念ながら魔術礼装でもあった。彼女が行う「メンテナンス」は、ただの銃としてだけではなく魔術礼装としてのメンテナンスも同時に行う物である。故に、ただ物理的に銃を組み立てれば良いと言つような単純な作業ではなかったのだ。

……最も、それすらも十数分程度で済ましてしまふ辺り、十二分に早いと言えるのだが。

(それに、さやかはほぼ確実に私の言つ事なんて聞かなかつただろうしなあ……)

半ば確信を伴つた直感にため息が出る。

そもそも今回は、出現位置があまりにも悪すぎた。

ただでさえ病院に現れた魔女と言つ物は甚大な被害を及ぼすと言つのに、正義感の強いさやかがただ放っておくことなどする筈が無い。

その上、「あんな状態の」上条恭介がいるのだ。さやかが大人しく退去している可能性は、ほぼゼロと言っていていいだろう。

(……マミさんはもう突入してるんだろうね。)

実はキツカは既に、町中に使い魔を放っていた。後で使い魔を放つより、先にやれることだけやっておこうと言う考えからの行動だったが、お陰で病院の近くをつろつろしているマミの姿を見つける事が出来た。

恐らくまどかがあの場から探しに出ても、数分のうちに見つかるような位置に居た事を考えると、すでに結界に突入して五分と少しぐらいは経っているだろう。

(……いやな予感がする。)

先ほどのさやかの件とは違い、漠然とした不安。何の根拠もないそれが、キツカの背中を突き動かす。

だがそもそも、何を不安がる必要など有るのだろうか？

マミは既に三年間も戦い続けているベテランだ。魔女は確かに強いが、マミもまた十二分に強い。

リボンを利用した切断、捕縛、機動。無限に生み出される銃による火力は高く、フィニッシュブローこと「ティロ・フィナーレ」に関しては言わずもがな。武装的に近接戦に少々難は有るが、銃を棍棒代わりにしたり、経験に裏打ちされた「接近させない戦術」等により、はっきり言って弱点として機能していない。

彼女の戦闘をまともに見るのはたった一日だけであったが、それでも並みの魔女相手に苦戦するような実力ではないと言う事は十分知っているはずである。

だが、それでも尚ぬぐえない、この嫌な感じは一体何なのだろうか？

(……急がないと。)

もうすでに病院自体は視界に入っている。夕日に照らされ赤く輝くと同時に、暗い影を抱えたガラス張りの建物。

その影が、キツカにはとても不吉な物のように思えた。

それからのマミの暴れっぷりは、実に凄まじいものだった。

空中に召喚したマスケットによる一斉掃射。大群に対し射撃、銃床打撃、リボンによる切断を組みあわせた無双。大きめの砲による進行方向の一掃。

まさにやりたい放題と言っていよいよような戦闘で、結界の奥へと突っ込んでいく。

と最深部への扉が見えた。マミはそのまま扉を開け放ち、中へと入る。

やはり、今回の最深部も円筒形の広場だった。中の様子もこれまでと同じくお菓子だらけ。ただ違うところを挙げるとするならば、異様に背の高い机や椅子などがあるぐらいか？

少し辺りを見回すと、居た。キュウベえとさやかだ。広場の中心に對して隠れるように巨大なドーナツの近くで身を潜めている。

「お待ちませ。」

「はあ、間に合ったあ……………」

「マミが到着したことに、さやかは安堵を示す。だがまだ気を緩めるのは早かったらしい。」

「気をつけてー出て来るよー!」

キユウベえの一声に、全員の視線がこの空間の真ん中にある机と椅子に向けられる。そこには、鼓動するお菓子の箱があった。

今にもちきれんばかりの様子を見せるそれは、より一層強く鼓動すると……………」

裂けた。

お菓子の魔女
Charlotte

椅子の上に出現したのは、身長三十センチほどの人形だった。非常に愛くるしい見た目をしているが、纏った邪気はそれが魔女であることを如実に示していた。

魔女の出現を確認すると、マミは表へ出る。自信に満ち溢れたその顔には、一片の不安要素も存在しない。

そして、魔女の座す椅子に向かって駆け出す。手には逆手に持たれたマスケットが出現する。

「せっかくのどい悪いけど!」

そしてそのままその椅子の足を蹴り飛ばす。椅子の足はへし折れ、
支えを失った小人は特に抵抗もせず落下してくる。

「一気に決めさせて……」

数丁のマスケットがマミの周りに突き刺さる、一方で逆手に持たれ
ていた銃は、そのまま両手で握られると……

「もらっわよー」

バツティングの要領で、振りぬかれた。銃床が小人の頭部を直撃
し、打ち上げられる。

そのまま魔女は近くのお菓子に打ち付けられるが、その瞬間幾つも
の銃弾が彼女を貫く。先ほど出現したマスケットを利用した連射
だった。

落下してきた魔女にマミが近づくと、マスケットを一撃接射する。
そして貫通し、地面に突き刺さった弾丸からリボンが伸び、その小さ
な体躯を縛り上げた。

「やったあー」

さやかが歓声を上げる。魔女を捉えた以上、この後マミが決める技
は一つしかありえない。

「ティロ

高い位置に吊るされた魔女に向けたマスケットを肥大化させる。
砲と化したそれを見ても、魔女は抵抗と言う抵抗を見せない。

「ファイナーレ！」

砲口から赤いリボンが放たれる。小型目標用に作られたそれは、目標に命中すると即座に絡みつき、対象を圧殺すると言う代物だ。

リボンの先端が、魔女に突き刺さる。その機能に従い、赤いリボンは魔女に巻きつくと、その小さな体を致命的な圧力で押しつぶし、

黒い影が、バマミへ急速に迫って行った。

第七話「ありがとう」

午後4時50分。

夕日に照らされ、赤く染まった見滝原市立病院の入口付近に、一人の人物が駆け付けてきた。

黒いコートに、黄色のベスト。胸元にはクラバットと、一般感覚からすればかなり奇抜な恰好をした少女は病院の前に着くと、しきりに辺りを見回しだす。

恰好も相まってかなり目立つ行為だったが、数少ない通行人が彼女の存在に気付く事は無い。彼女のコートは魔術により強化された防護服でもあったが、同時に認識攪乱用の礼装でもあったからだ。今の彼女なら、たとえ雑踏のご真ん中に放り込んだとしても気づかれることは無いだろう。

……最も戦闘中や、何の処置も施していない人物との同行時などは、その効果を大きく減ずる事になるのだが、今は関係のない事である。

やがて彼女の目が、病院の壁のある一点を捉えた。その場に駆け足で近づくと、彼女は右手を掲げて一言小さくつぶやく。

すると、白い円形の板のようなものが出現した。知る者の間では、「結界の入口」と呼ばれるその様子を見て、少女……秋水キツカは思考を巡らせる。

(……結界こそ開いてるけど、この様子だとまだ完全に孵化した訳じゃなさそう。何とか間に合ったかな。)

先ほどから根拠の無い予感に苛まれていたが、魔女がまだ本格的に活動していない以上、まだ想定しうるような状況には陥る事はないと言っ事である。

その事にふう、とひとまず安堵する。

(……と、なると。あまり大きな魔術を使う訳にはいかないね。まあ、一応06は準備しておこう。)

右腰から06と呼ばれた銃を引き抜くと、シリンダーを振り出し確認する。薬莖底面の雷管部にはどれも撃針痕は無く、未使用の実包であることを示していた。

(……よし、行くか。)

そしてそのままシリンダーを振り戻すと、結界の中へと足を踏み入れた。

結界の中に足を踏み入れて数分が経過した。当然、たった数分では最深部になど着いているはずがない。

が、キツカは前に進むその足を、早くも止める事となっていた。

「で、なんでこんな事になってるんですかね……」

「……………秋水キツカ。」

視線の先には、赤いリボンで簪巻きにされ、吊し上げられたほむらの姿があった。流石にこんなものを見て素通りするなどと言っ事は、キツカには出来なかった。

(「これを見たら余計に嫌な予感がしてきた……」)

誰がやったのか。その理由を含めて容易に想像できたが、それがまた原因でキツカは頭を抱える。

「……今下ろすから、じっとしてて。」

そう言ってほむらに近づく。だが剣を出現させる様子は無い。流石にそこまでやれば、グリーンシードを刺激してしまうと言う理由からだった。

「手でちぎれるほど軟な作りじゃないよ?これ。」

「うん、わかってる。」

そう言いつつも、キツカはほむらを包むリボンの一部を、両手で掴んだ。動作的には、どう考えても無理やり引きちぎるうとしていようにはしか見えない。

だが次の瞬間、薄くその両手が光ったかと思うと、その部分のリボンがいとも簡単に崩れ落ちてしまった。ほむらはその様子に目を丸くする。

リボンの一部が切れたことで、ほむらを縛る拘束が解ける。吊り上げられていたほむらは地面に着地すると、手首をさする。

「バママミのリボンは相当丈夫だったはず………いったいどうやったの?」

「自分の持つ方向性を最大限利用しただけ。それより、ママさんは?」

説明ともいえないような返答だったが、一旦は保留することにした

らしい。ほむらがキツカの問いに答える。

「先に行ったわ。出来るだけ、急いだ方がいい。」

「……分かった。じゃあ、とりあえず進もうか。話は進みながらにでも聞くよ。」

そう言って、キツカは結界の奥へと足を向ける。ほむらもその後が続くことにした。

歩きながら聞いた話によると、今回の敵はバママミにとって非常に相性の悪い相手なのだと言う。

なんでも、いくらかの外傷を与えたとしても無視して突っ込んでくることの出来る魔女なのとか。

バママミは接近させない戦術を確立はしているものの、基本的にそれは銃撃に敵が怯んだりすることを前提として組み立てた物だ。それを無視して突っ切る事の出来る魔女は確かに脅威だろう。そんなものを相手にすることになれば、苦戦は必至。しかも今回は、さやかにまどかと言う保護対象も存在する。そう、ママミにとっては非常に不利な戦いとなる事は明白だった。

なぜそんな事を知っているのか？と言う疑問はあったが口には出さない。今その事について言及しても、恐らく答えは返ってこないだろうと言う判断からだった。

「それで警告に来たら、もの見事に拘束されたわけですか。」

「……ええ、そうよ。無様だと思っのなら笑えばいいわ。」

自嘲的に言い放つ。その言葉は非常に刺々しい。

「そうやってつっけんどんな言い方するから拘束されたんでしょうに……

目的も、敵か味方かすらも分からない、その上この態度。そんなじゃ信用されないのも当然だって……」

「その割には、あなたは私の言っ事を随分あっさり信用するのね。」

キツカの言葉にはむららが意外そうに返す。

「ん〜……別に全面的に信用したわけじゃないよ。

でも、そもそも私に嘘をつく理由も、敵対する理由も無いみたいだし。」

「……そう。」

グリーンフィードを必要としないキツカは、基本的に魔法少女との利害関係において対立することはまずない。対立があったとしても、それは魔女の使い魔の扱いに関する事ぐらいのものだ。

ほむらはその辺り、別段騒ぎ立てる事も無かったし。理由はどうあれ、まどかとさやかが魔法少女となるのに反対である、と言う立場も同じであった。そう考えていくと、特に対立したりするような要素は全く持つて見当たらないのである。

彼女が何者か、と言う事は分からない。だが特に対立するような事がないのであれば、荒波だてる事も無いだろう。つまりはそういう事だった。

「それよりも、一昨日の話。私に関しては明日でいいかな？」

「ええ、構わないわ。」

一昨日、初めてほむらと邂逅した時には、「また後日」と言う事になつていた案件についての提案に、ほむらは特に気分を害した様子もなく答えた。

この二日、結局二人が落ち着いて話を出来るチャンスは無かったといえよう。キツカの方と言えば、学校が終わってすぐにママ達についていかなければならなかったし、ほむらの方も、それを遠巻きに監視し続けていたのだから、当然である。

放課後がダメなら、学校で話し合う、と言う事も考えたが、昼休みの30分40分程度で話すのは、あまりにもせわしなさすぎた。

「じゃあ、明日。私の家なんかでどうかな？」

「それでいいわ。」

どこでやるか、と言う事はほむらにとってはどうでもよいことのようにうだった。キツカの提案に、ほむらはあっさりと肯定の意思を示す。

……と、そこで会話が終わってしまった。沈黙を抱えたまま二人は進み続ける。

(……会話、無いな。まあ、当たり前と言えば当たり前なだけ。)

そんな事を頭の中で考えるキツカ。だがそもそも二人は現在、敵同士ではないが、味方同士でもないと言うような関係にあるのだ。それを考えれば、仮にも死地たる魔女の結界で、和気あいあいと話しながら進んでいるという事の方がおかしいのだから。

“……キツカちゃんは、さ。”

不意に、頭の中に響く言葉。それは今日の昼、まどかから飛び出した、あの問いだった。彼女とのやり取りを、今一度思い返す。

(……実際、どうなんだらうね?)

その中の、自分の応えた言葉に一石を投じる。

別に、彼女に嘘をついたつもりは無かった。まともな神経をすり減らしたと言うのも本当であったし、そのせいで怖くないと思うようになった、と言うのも嘘ではない。

だがそれらは、あくまで自己分析の結果でしかない。人が自分自身の顔を見る事が出来ないのと同じように、また自らの精神状態に関して完全な分析など、できようも無いのだ。……最も、それは他者に対する分析に関しても言える事なのだが。

そもそも正直な所。キツカには、自分が本当に「死」と言う物を恐れているのかすら分からなかった。

もちろん魔女にやられて死ぬのは嫌だ。が「怖いか」と問われると少し違うよ様な気がするし、戦いに関しては色々擦り切れてと「慣れきつて」しまっていたこともあり、殆ど怖いとも思えない。

そんな事もあり、自分が本当に「死」を恐怖しているのかと言う判断材料が、彼女には全く見当たらなかった。一度本気で死ぬ目に遭ってみれば分かるかもしれないが、残念ながら進んでそんな目に遭おうとは思えない。

ふと、隣を歩く人間に意識を向ける。

暁美ほむら。四日前に転校したばかりで、一昨日の接触に加え、昨日の昼休みに一言二言交えただけと、あまり言葉を交わしたことの無い人物でもあった。

その表情は普段と同じく無表情で、特にこれと言った変化は見られない。歩調や、呼吸なども同じく、である。

「ほむら。アンタは魔女退治や、死ぬのが怖いと思う？」
「え？」

いきなりの質問に、ほむらが驚いた様子を見せた。顔を見てみれ

ば、あからさまに驚いた顔をしている。

「ん？……ああ、いきなり名前じゃダメだった？」

「え……いえ。別に構わないのだけど……どうして、そんな事を？」

いきなりそんな事を聞かれば、誰だって驚くだろう。苦笑しながらもキツカはその問いに答えを返す。

「今日の昼に、まどかから全く同じことを聞かれてさ。私の意見じゃ、まず参考にならない内容だったな……と、思ってね。」

「……そう、まどかが。」

そう言つと、何か思つところがあったのか、しばらく黙りこんでしまふ。やはり、彼女にとって「鹿目まどか」と言う名前にはそれなり以上に意味を持つ物のようだった。

「……あなたは、なんて？」

「キツカでいいよ。私は……」

と、その時だった。結界の空気が一気に変わった。張り詰めた様子のそれに二人が奥を見据える。

「……「これは。」

「お目覚めですか。」

どつやら、結界を張ったグリーンフシードが活性化を始めたらしい。キツカがリボルバーの撃鉄を上げる。

「嫌な予感がする。突っ切るけど構わない？」

「いいえ、全く問題ないわ。」

じきに大量の使い魔が湧出してくるだろう。その上魔女もほとんど目覚めたも同然であるならば、もはやコソコソとする必要など存在しない。

ほむらはその場で変身し、出現した鉄色の盾からアサルトライフル、89式小銃と呼ばれるソレを取り出すとセレクターを「ア」から「レ」に切り替えた。それに合わせるように、キツカも八つの光の輪と剣を出現させる。

目の前に数体の使い魔が飛び出してくる。目があるのかは分からないが、その使い魔たちは確実に彼女らの姿を捉えていた。

「そう。じゃあ、行くよー」

そう言って、キツカは結界の奥へと駆け出した。

「10点」

飛び出してきた使い魔に、銀色の剣が突き刺さる。恐らく顔と思しき部分を、射撃用ターゲットに見立てたのであろう。キツカがその声を上げる。

と、今度は至近距離から使い魔が飛び出してくる。数は六。ほぼ真横から跳びかかってきた。

「キヤアアアアアアアアアア」

だがそれも容易に撃退される。キツカの周りの剣が閃き、一瞬にし

てそれらを切り裂いた。

「ほむら！そっちは！」

「問題ないわ。」

声を上げて、後方のほむらに声をかける。走りながらの攻防だったが、きちんと付いて来てくれているようだった。

ちらりと後ろを確認してから前を見据える。

(もつそろそろ、使い魔の大群が現れ出す。)

先ほどからキツカ達に襲いかかる使い魔は、単体や、多くて一桁台と言う塊で現れて来た。恐らくまだ湧出し始めたばかりで、群れが出来る上がっていないからだろう。

お陰で、今までほぼ立ち止まる事無く使い魔を殲滅できた。が、そろそろ群れが現れてもおかしくない。そうなれば、今までのように前に進む事は叶わないだろう。

(……使うか。)

キツカは右手を確認する。そこには、撃鉄の上がった銀色のリボルバーがある。

いつもなら、彼女が使い魔戦にそれを使う事は殆ど無い。計二十四発しかないそれを道中の使い魔に対していちいち使っていれば、一瞬で弾切れを起こす上、何よりオーバーキルもいい所である、と言うのが主な理由だった。

だが、彼女にとって今はそれどころではなかった。根拠などまるで存在しないにもかかわらず、どうしても嫌な予感が彼女の頭から拭えなかったからだ。そんな彼女にとって今一番大事な事は、一刻も早く

最深部に着くことである。そのためには出し惜しみなどしている場合では無かった。

二人は曲がり角を回る。と、ついに見えた。使い魔の群れだ。距離は十数メートル、数は三十程度。

(拡散。範囲、射線軸より30度)

「邪魔ッ！」

撃鉄が落ちる。すると、銃口から60度の範囲に渡って光の線が大量に射出された。光のシャワーとも言つべきそれは、使い魔を一瞬のうちに消滅させる。

手前の数体を打ち漏らしたが、それらは射出した剣で一掃する。この間、対応に足を止める必要はまるでなかった。

「また、すごい火力ね。」

「それはどうも！」

ほむらからの賞賛の言葉に応えつつ、尚も散発的に飛び出してくる使い魔を処理していくキツカ。

しかし、また次の大群が現れる。上から降り注ぎ、前面を囲むように現れた数は百を超えていた。

だが。

(拡散、二連射。共に射線軸より45度)

左右前方のそれぞれに対して、二連続でトリガーが引かれる。計約180度にも及ぶ掃射で、その場の使い魔の殆どが蒸発する。悲鳴な

ど上げる隙すらなかった。

そうして使い魔が一掃された結界を走る。すると、ある物が地面に落ちていたのが見えた。

「これは……」

「行く先はこっちで合ってたみたいだね。」

それはバマミが常用しているマスキットだった。と言う事は、バマミはこの道を通ったので間違いないと言う事だ。

別にこれまで無根拠に結界を進んでいた訳では無い。しかし、それでも通り道を間違っている可能性は否定できなかっただけに、キユウベエのサポートで最短距離を行っているはずのバミが通った痕跡があるのは非常にありがたかった。後は、これをたどって行くだけだいい。

「銃はまだ消えてない……つまり。」

「バマミははまだ健在、と言う事か。まだ間に合うかも知れんね。」

一体何に間に合うのか？と言う話ではあるが、なんにせよ、今は先を急ぐだけである。

そこから先へ、落ちているマスキットを頼りに走っていく。バミが数を減らしてくれたからか、大群との遭遇も、そこからしばらくなかった。

散発的に現れる一桁代の群れを、剣で一掃しながらキツ力は思考する。

(……気のせいかな？落ちてる銃の数がいつもより……)

視線の先に存在する、白い長物。120センチ近い長さのあるその数が、どうもキツカにはいつもより多いように感じた。

いや、それだけではない。途中で、明らかに「砲」クラスのものもいくつか落ちてはいなかったか？彼女は、いつもここまで派手に暴れまわったりするような人物だっただろうか？

(……言い方は悪いけど、「調子に乗っている」感じがする。)

まるで「祝砲だ！」と言わんばかりのばら撒き様に、キツカが評す。となれば、ママがそうだった精神的な要因が何かある筈なのだが……内容こそわからない物の、原因は一つしか思いつかない。

(まどか……ママさんに一体何言ったのよ……)

五年来の付き合いにして、恐らくママについて行って結果に入っているであろう友人に、頭の中でつぶやく。何かあるとすれば、どう考えても彼女しかありえない。

「ぶっかしたの？」

「……いや、なんでもない。」

どつやらあきれていたのが顔に出ていたらしい。ほむら呼びかけに無難に返す。

何があつたかは分からないが、恐らく完全に舞い上がってしまったいる彼女は、いつものコンディションとは言い難いだろう。

いい面もある事はあるのだろう。だが先ほどからしている嫌な予感のせい、キツカには今のママの状態が、あまりよろしい物とは言い難かった。

(……急ごう、余計に不安になってきた。)

また飛び出してきた使い魔を串刺しにしながら、そう思う。魔女の気配も近い、もうすぐ最深部だ。

だが前方を見据えると、嫌な物が目に入ってきた。

広場だ。半径50メートルほどで、こちらとは反対側に最深部への扉らしき物が見える。それはいい。広場があること自体は別に構わない。

使い魔が、そこを大量に陣取っていた。広場いっぱい、と言う訳では無かったが、それでももうんざりするような量の使い魔がひしめいている。

その光景にげんなりしながらも即座に決断すると、キツカがほむらに声をかける。

「扉まで強行突破するけど。付いてくれる？」

「当然。」

非常に頼もしい返答に、ほむらの方に一瞬にやりとすると、前を見据えて銃を構える。

そしてそのまま広場へと突入した。

(拡散。射線軸より30度。)

まずは一撃。前方の使い魔を蹴散らし道を作ると、出来た道が塞がる前に走り抜ける。

しかしそれでも半分ほど行ったと所で道がふさがってしまった。だが、それは彼女にとって十分想定内の出来事である。

(拡散。 射線軸より30度。)

再びの一撃。 また使い魔の群れの中に道が出来上がると、今度こそ扉まで強行突破する。

「……ッ、クソッ……」

だが扉まであと一步の所で道がふさがってしまった。 前方をふさぐ使い魔の数は、十八。

再び、キッカの右腕が上がる。 三度目の射撃。

(拡散。 射線軸より……)

と、その時だった。

激しい破裂音。 すると、前方の十八が同時に消し飛んだ。

隣のほむらを見れば、89式小銃が煙を吐いている。 どうやら彼女が対処したらしい。

これで、もう扉まで邪魔する物は何もない。 その扉を改めて見る。 その扉から発せられる邪気は、それが最深部につながる物だと言う事を端的に示していた。 そのまま扉まで走り込む。

「開け……」

そしてそのまま蹴破るように扉を開くと、最深部へと転がり込んだ。

そして、そこでキッカが見たのは……

立ち尽くす、バ MMI。そしてそれに、何か大きな黒い影が……

引き金を引いていたのは、殆ど反射だった。

照準は、影の先端。間に合うか、当たるかどうかなどと言う事は、全く考えていない一撃。

(間に合えー)

光の線が、一気に伸びる。影の先端は、もうすでに MMI の目の前だ。そして、

光が、影の先端を抉り取った。

「MMIちゃんー」

バ MMI の名前を呼ぶ。確かに黒い影に当てはしたが、果たして間に合ったかどうかは微妙だった。先ほどまで MMI が立っていたところを確認する。

だが、そこに MMI はいない。影も、形すら見当たらない。

キツカがとっさに辺りを見回す。

すると、いた。バ MMI だ。先ほど立っていた場所から少し離れた所で座り込んでいる。隣にはどういつ手品を使ったのか、先ほどまでキツカの隣に立っていたほむらがいる。

「……………え、なに？私……………」

「下がっていて。後は、私がやる。」

どろぢやらマミは、自身の身に起こったことに少々混乱しているようだったが、無事なようである。その様子を見て、キツカは一息ついた。

「キツカちゃん！」

と、キツカを呼ぶ呼ぶ声が響いた。そちらを見ると、かなり驚いた様子のまどかとさやかがいる。キュウベえも一緒だ。

キツカは二人の元へ向かう。かなり青ざめた様子だったが、何事も無かったようだ。二人に声をかける。

「ごめん、遅れた。」

「よ、よかったあ……」

まどかが安堵の声を漏らしてキツカを迎える。まだ少し顔が青かったが、かなり安心した様子だ。

「なんで、転校生と？」

「途中で簀巻きにされてたから、助けた。なんでそんな事になったかは、知らん。」

続けて、さやかがキツカに声をかける。理由に関しては、あえて伏せておく。後でマミ本人から話させた方がいいだろうと言う判断からだった。

唐突な爆発音が鳴り響く。

まどかとさやかが驚いて音源を見てみると、黒い影を翻弄するほむらの姿があった。

瞬間移動のような挙動で、黒い影をかわしつつ、爆破していく。まさに一方的な展開だった。

そんな様子に安堵したキツカだったが、次の瞬間、自分の手元を見て一気に青ざめた。

シリンダーを振り出す。そこに見えるすべての薬莖に、くつきりと撃針痕が付いていた。これは、シリンダー内の銃弾は、すべて撃ち尽くされていると言う事に他ならない。

(後一発使ってたら、確実に間に合わなかった……！)

それはつまり、先ほど一撃が最後の一発だったという事だ。もし道中でもう一発使っていれば、どれだけ早くリロードしたとしても確実に間に合わなかっただろう。

「どうしたの？」

「……なんでもない。」

どうやらこちらの様子に気づいたらしい、まどかが声をかけてくる。わざわざ不安にさせるような事を口にする必要は無いだろう。適当にごまかすと、シリンダーから空薬莖を叩き出し、左のベルトポーチから実包の束を突っ込んだ。

改めて戦場を眺めると、戦いは佳境に差し掛かったようだった。黒い影はすっかり疲弊した様子で、ほむらの方は全く持って余裕そうだ。

どうやら脱皮することである程度再生するらしいが、脱皮するたびに爆破され、また脱皮すると言う事を繰り返している。既に黒い影は死に体だ。

と、次の瞬間。ひときわ大きな爆発が影を包み込んだ。どうやらもう限界だったらしい。脱皮することも無く、完全にその体は四散し

た。

「……やつ、た？」

さやかが一言つぶやく。あまりにも単調であっさりとした幕切れに、その語尾が疑問形になっている。それほどまでに、この魔女は強烈な印象を残していたのだろう。

かくして、その場にいた者たちを凍りつかせた凶悪な魔女は、その存在を消滅せたのだった。

「命拾いしたわね、貴女達。」

結界が解けると、同時に変身を解きながら、ほむらがそう言い放つ。場所は見滝原市立病院の前だった。結界の中ではかなり動いていたはずだが、現実での位置は大して変わらなかったらしい。

と、ほむらが何かをを拾い上げる。黒い球体に銀製の細工と針が刺さったような物体、グリーンフィードだ。

「これは私が貰うけど、構わない？」

「うん。私は構わないけど、マミさんは？」

そう言ってマミに声をかけるキッカ。マミと言えば、自らの身に起きたことに、まだ少し顔を青くしていた。

「……ええ、構わないわ。」

まだ憔悴した様子だが、何とか普通に返答する。が、ほむらはそちらを一瞥するだけで、何も言わずにグリーンフシードをスカートのポケットに突っ込んだ。

「これで分かったでしょう？ 魔女退治がどれだけ危険か。」

そしてそのまま、まどかたちの方に向き直ると、強い口調で言葉を放つ。

「一瞬でも気を抜けば、死ぬ。こんな生活を、私たちは毎日続けなければならぬ。」

いつもなら、真っ先にはむらに突っかかっていくさやかすら口を開かない。彼女らには、それ掛け今回の出来事は大きかったと言う事だった。

「これが、魔法少女になると言う事よ。……よく、覚えておきなさい。」

言い終わると、二人に背を向け歩き出す。

そしてその背中が見えなくなるまで、その場にいる人間は誰一人として声を上げようとしなかった。

とあるマンションの一室。ファミリー向けの大きい部屋であるそこに、一人の少女がベットに寝転がっていた。

年齢15、6ほどの少女だったが、この部屋に彼女以外の住人はいな

い。表札にも「バマミ」と書かれているだけで、それ以外の名前は見当たらなかった。

なぜファミリー向けの部屋に、成人もしていない少女が一人住んでいる、というアンバランスな状況になったかと言えば、全ては三年前に起こったある出来事が原因だった。

トラックと、三人家族の乗った軽自動車の正面衝突事故。

トラック運転手が居眠りを起こし、反対車線に突入。走っていた軽乗用車に、正面からまともに激突し。結果、トラック側は運転手が骨折。軽自動車側は運転席、助手席に乗っていた人物が即死し、後部座席に乗っていた一人も重傷を負うと言つ大惨事となってしまうた。

原因は、トラック運転手が規定時間を超える操業をしていて疲労がたまっていたとかで、運送会社の管理責任が云々などと言う話があったが、彼女にとってそんな事はどうでもよかった。

重要なのは、彼女はその事故で両親を喪つた事。そして、

その日、彼女が魔法少女となつた事、であつた。

それ以降、彼女は見滝原を守るために戦つてきた。

一般には知られていない、そしてこれからも知られることも無いであらう怪異、魔女。

それとの戦いは常に命がけで、彼女の最初の祈りで繋がれた命を、みすみす危険にさらす行為でもあつた。

何故、自らの願いをふいにするような行為に走っているのかと問われれば、その理由の一つに「後ろめたさ」が有るだろう。

あの日、あの場所で。彼女はそこに現れたキュウベえにひたすら祈つた。「助けて」と。その結果、バマミの命は助かつた。

だが、よく考えれば彼女は自分の両親も助けられたはずである。どう

すればよかったか、などと言う事も分かっている。あの時、彼女は願えばよかったのだ。家族全員の救済を。

故に彼女はこう思った。「あの日、私は自分の事しか考えていなかった。そのせいで、自分の親も助けられたはずなのに、自分しか助からなかった。」と。

無論、仮定の話に過ぎない。既にそれは過去の出来事で、そうしたところで実際どうなっていたかなど分かりようも無い事だ。

だが、少なくとも彼女はそう思った。自らのわがままで、親を犠牲にして生き残ったと。

だから彼女は誓ったのだ。他人を犠牲にして得たこの力は、他人のために使う。自分で独占する事などできないと。

寝転がったまま、窓の外を見る。真っ赤な球体は、その身を半分以上地に沈めている。後幾らかすれば、完全に日は落ち切るだろう。

(「ご飯……は、今日はいいや。食べる気には、なれないわね。)

まだ憔悴した様子の彼女の心は、未だに大きく揺れていた。今日、突如現れた命の危機は、それだけ彼女にとって大きいものだったと言う事だ。

先ほども言ったが、魔女との戦いは常に命がけである。そんな戦いに身を投じている彼女だが、別に彼女の自らの命の価値が矮小化された訳では無かった。いや、むしろ大きくなったと言っべきだろう。

何せ、彼女の命は自らの両親の犠牲の上に成り立っているのだ。それをふいにすると言う事は、その犠牲の意味すらふいにすると言う事だからだ。

それ故彼女の生存に対する執着は、並の人間、魔法少女等よりも大

きいものだった。

(……)のまま、寝てしまおうかしら?)

今日は、疲れた。風呂には入っていないけれど、それはまた明日朝にシャワーを浴びればいい。そんな事を考えているときだった。

インターホンの呼び鈴が、部屋に鳴り響く。

一体誰だろう?と、その身を起す。特に宅配便で物を頼んだ覚えも無ければ、誰かを呼んだ覚えも無かった。

そのまま部屋の中を歩いていき、玄関へ向かう。特に外を確認もせずドアを開けると、意外な人物がそこにいた。

「あら?秋水さん?」

「どうも。」

マミの問いかけに、キツカは右手を軽く上げながら応える。

「今日は帰ったんじゃない、無かったの?」

結局、今日の、魔法少女体験コース、は中止となっていた。マミの精神状態上、とてもではないが出来るような状態ではなかったのは事実であったため、彼女の言う通りこの日は皆、帰る事になったのだ。そして、今日の中止・解散を提案してきたのは当のキツカであった。まどかやさやかにも家に帰るように促した彼女が、一体なぜここにいるのがマミには分からなかった。

「いったん帰りましたよ?取りに行く物もありましたし。」

……とりあえず、上がってもいいですか?」

「え、ええ。構わないわよ。」

とりあえず、玄関先で立ち話をするわけにもいかないの、彼女を部屋に招き入れる。

「おじゃまします……と、へえ……なかなか……」

「今、お茶を入れるわね。」

そう言って、キツカをガラステーブルの前に座らせると、キッチンに向かう。マミは洗っておいたティーカップとポットを戸棚から取り出し、作業を始める。

その作業の合間に、キッチンからキツカの方を何度か伺うが、あたりを少し見回すだけと特に何をしようと言う気配も無い。一体何をしに来たのだろうか？

やがて、一通り用意したマミはそれを持って机の方へと向かっていった。

「お待ちせ。」

「ああ、どうも。いただきます。」

ソーサーに乗ったカップを取ると、それに口をつける。

「……うん、おいしい。上手ですね。」

「気に入ってもらえて良かったわ。それで、どうしてここに？」

「ん？ああ、そうだった。ちょっと待っていてくださいよ……」

マミの問いにそう反応すると、持っていたカバンに手を入れて何かを取り出した。そして、それを机の上に置く。それを見た瞬間、マミは大いに驚いた。

真っ黒な球体に、串が突き刺さったよ言うな物体。回ってもいない

にもかかわらず、コマのように自立しているそれは、まぎれもなくグリーンシードだった。しかも、穢れなどの様子を見るに、明らかに未使用の物だ。

「今日、結構魔法を奮発してたまましたよね？だから穢れも結構貯まってるんじゃないのかなー……」と、思いました。

「そんな、悪いわ。今回グリーンシードを手に入れられなかったのは、あくまで私の責任なのに……それに、」

さらに何か言おうと口を開きかけたが、その前にキッカに口をはさまれてしまった。

「まあ、いいですよ。私には一応不要な代物ですし。それに、これまで溜まる一方だったから、腐るほど余ってるんですよね。」

「でも……」

そこからさらに反論しようとするが、言葉が出ない。彼女にはこれ以上その贈り物を断る理由が見つからなかったのだ。そのまま沈黙してしまう。

そしてそのまま、キッカもしゃべらなくなってしまった。部屋にやり場のない空気と沈黙が流れる。

しばらく、その状態が続いた。お互い、語ろうとせず、動こうともしない。

最も、だからと言ってお互いの頭が働いていないと言う訳でもなかった。この沈黙をどうにかしようと考えていたマミは、ある考えに思い至った。

(もしかしたら、彼女は……)

「」の部屋に、マミの元に来た理由。それは、もしかすると……

「秋水さ……」

「……銃を。」

「え？」

その事について、キツカに問おうとした時だった。唐突に、キツカが口を開く。

「銃を、見せてくれませんか？いつも使ってる、アレ。」

「え……ええ、別に構わないけど……どうして？」

突然の申し出に驚くマミは、そのまま彼女に理由を問った。すると、キツカまた鞆に手を入れると、今度は別のある物を取り出した。リボルバーだ。それも、彼女がいつも使っているあの銃である。銀色に輝くそれを机に置く。

「実はこれ、自作なんですよ。」

「え、そうなの？」

キツカの言葉に、マミは驚いた様子を見せる。てっきり銃自体は既製品で、特殊なのは銃弾だけだと思っていたからだだった

「ええ、それでちょっと銃の知識もある事もあって、マミさんの使ってる物はどんな物なのかな……」と思った次第で。」

「へえ……分かったわ。弾と、火薬は抜いておくけど、構わないわよね？」

「ええ、全く。」

やはり、銃を作ったことが有る人は、他人の銃にも興味を持つものだろうか。と、マミは感心しながら銃を作り上げた。

いつもと同じ、白い銃。それを手に取ると、キツカに手渡す。

「あなたの銃も、見て構わないかしら？」

「ええ、構いませんよ。その為に持ってきましたから。」

そう言うと、また彼女も机に出した銃のバレルを握ると、黒いグリップをこちらに向けて手を伸ばしてきた。マミはそのままグリップを握りこみ、受け取る。

随分と重い銃だ、と言うのがその銃の第一印象だった。大体三キロぐらいだろうか？この重さを頼もしいと取るか、邪魔な物と取るかは人によって別れそうな重さだった。

だがよく見てみると、重いだけではない。その重さに見合うだけの大きさも、この銃は備えていた。

バレル長は、二十センチほど。全長は、四十センチ程だろうか？マミの想像する拳銃などに比べれば、はるかに大きいものだ。それを考えれば、この重さも納得できるような気がした。

と、銃の左面を見ると、銃身に刻印が彫られているのが見えた。アルファベットのそれを声に出して読み上げていく。

「ア・キ・ミ・ズ……アキミズ、M06？これが、この銃の？」

「ええ、アキミズM06、30口径回転式拳銃。一般的な命名方式にならって付けただけですけどね。」

どうも、銃の名前と言うのは「設計者・もしくは発売している会社の名前」「『モデル』の略の『M』と、設計もしくは採用されたされた年の四桁もしくは下二桁」の二つを以って、命名される事が多いのだと言う。今回の場合で言えば、設計者はキツカなので「アキミズ」、2006年に設計したのでその下二桁を取って「M06」としたのだそう。

「へえ……そういう風に名づけられてたのね。」
「この世に存在する大概の兵器の名前なんてそんなものですよ。ただ場所によって『M』が『式』になったり。その後に続く数字も、その土地独自の曆にならってつけられたり、単純に何番目に設計したかって理由でつけられたりで、結構バラバラですけどね。」

兵器と言えば、複雑そうな名前を付けていそうなイメージがあったが、蓋を開けてみれば案外単純な理由でつけられていたことが、マミにとっては意外な事だった。最も、合理性が求められる軍隊において使用される機材に、わざわざ複雑な名前を付ける筈が無いのだが。

「なら、私の銃はどうなるのかしら？初めてその銃を作ったのが三年前だから……」

「さしずめ、『トモエM08』と行った所じゃないんですか？」

「ふふ、なんだか語呂が悪いわね。」

「だったら、この銃のスペックから名付けることにでもしましょうか。」

キツカの答えに、マミがそう返すと。彼女の銃を持ち直し、機関部を見て口を開く。

「作動方式は、パーカッションロック。随分とハンマーの首が長いな……」

そうして、キツカは彼女の銃を調べていく。途中、ライフリングの本数が多いと驚かれたりしたほかは、特に驚いた様子を見せることなく分析していく。

そんな様子のキツカを見ると、マミの心に先ほど浮かんだ考えが、再び浮上して来た。なぜ、彼女が今日、マミの元へ現れたのか。

もしそれが目的でないにしても、ママミにはこの状況が尚更分からなかった。よくわからない現状に、彼女の頭はさらに混乱する。

「どうして……？」

思わずこぼれ出てしまった言葉、どうやらキツカには聞こえていたらしく、視線の先は銃からママミへと変わっている。

「……あなたは、私を責めないの？」

「……どうして、そう？」

ママミの言葉に、どういふ事を言っているのか悟ったのだろう。だがあえて、その理由を問うようにママミに言葉を返す。

「……今日、曉美さんの警告を無視した上に、拘束したことよ。」

「一旦そこまで言い切ると、ママミはそのまま言葉を続ける。

「私は曉美さんの警告を無視して魔女に挑んだわ……その結果、鹿目さん達を危険にさらした。秋水さん達がもし遅れていたら、魔女の矛先は鹿目さん達に向いていた……」

「……………」

ママミの言葉にキツカは黙って耳を傾けている。ママミの言葉は尚も続く。

「もし、私が曉美さんを信用していれば、そんな事にはならなかったはず。……ずっと、あの子たちのために戦ってきたあなたには、私を責める権利が有る筈よ。なのに、どうして……」

ママミの判断ミスで、キツカの護っていた者を危険にさらした。その

事でキツカには彼女を責める権利があるし、心情的にもそうあって当然なはずである。

だが今の状況はどうか？彼女は責めるどころか互いの銃の談義をはじめだし、拳銃グリーフシードまで提供するなどと言っているではないか。彼女には、それが全く理解できなかった。

そんな彼女の言葉を、目を伏せて聞いていたキツカは、少し間を置いてマミの顔を見る。その目には、やはり責めるような感情は見られない。

「……別に、私はあの時の判断は間違ってたと思いますよ？」

「……どっついつ事かしら？」

キツカの思わぬ言葉にマミは驚く。あの時、まどか達を危険にさらした決断が、間違いでなかったら一体なんだと言っのだろうか？そんな思考が彼女の頭を駆け巡る。

「流石に問題が全く無かった、と言っ訳じゃ無いですよ？私も合流していないのに、まどかを結界に連れ込んだ事は、流石に問題だったと思いますけど。」

「……………」

口を閉ざして耳を傾けるマミに、言葉を続ける。

「でも、少なくともあの時の判断自体は間違いじゃ無かったと思う。」

「どっついつ？さっきも言ったけど、そのせいで鹿目さん達を危険にさらしたの？」

「どっついつ、も何も。それを一番分かってるのは、『魔法少女』と言っのものを知ってるマミさんじゃないんですか？」

「それは……………」

キツカの言葉に、マミは口ごもる。なぜなら、実際彼女の言う通りだったからだ。

問題なのは、暁美ほむらがどういう人物なのか、能力を含めさっぱり分からないことだった。そんな魔法少女を、マミは安直に信用するわけにはいかないのだ。

魔法少女と言う物は基本的に同じ地域に存在すれば対立を起こすことが多い。原因は言うまでも無くグリーンフィールドである。魔法少女の魔力回復の唯一の手段であるソレを巡っての戦闘と言うのは決して珍しくないのだ。

また、その戦闘において、本気で殺しにかかってくる手合いの者も、決して少なくは無い。戦闘を仕掛けなくとも、何らかの形で陥れたり、不意を打って背中を刺してくることだってある。さらに過激な連中になれば、「魔法少女候補」すら殺そうとする人間すら存在する。

もし、ほむらがその手合いであった場合、信用すれば取り返しのつかないことになっていただろう。マミの不意を打って背中から刺ししまえば、後の魔法少女候補まどかとさやかの処理は簡単だ。戦闘能力も、結界を脱出する手段も無い彼女らに、ほむらに抗う術は無い。

さらに、そこは魔女の結界である。相手が魔法少女にしる候補にしる、殺すにはうってつけの場所である。何せこの中で死んだ存在は、生きた人間が外に持ち出そうとしない限り、例外なく結界の崩落と共に死体ごと消滅するのだ。死人は一切の証拠も残さず、ただの行方不明として扱われる事となり。これ以上に楽な証拠隠滅は無いだろう。

結果として見てみれば、暁美ほむらはそういう人物では無かったのかも知れない。だが、そういう事も十分ありうるのが魔法少女の世界なのだ。その事を考えれば、マミの判断は決して間違った物とは言えないのだった。

「……………なら、信じればよかったのよ。」

しかし、だとすれば。

ほむらを信じるのが間違いで、彼女たちを危険にさらした判断が正しいものだと言うのなら。一体どんな判断をすればよかったのか？

そう、小さくつぶやいたマミに、キツカが言葉を返す。

「どんなに正しい判断でも、必ずしも結果が伴うとは限らない。この世界は、そういう風にできてるんですよ……」

「……………」

どれだけ正しい行動であろうと、結果はその時になってみなければ分からない。そして今回の場合、結果的には悪手ではあった物の、その行動に間違った所は無かった。

だから、責めない。責めれる事ではない。そう、キツカは言い切った。

「……………」

「……………」

だがそれであれば今度こそ分からない。

今日の失態を責めに来た訳では無い。先ほどの様子では、ただ銃の話をしに来た訳でも無いだろう。

では何故彼女は此処へ来たのかと言われれば、今度こそ見当がつかなかった。

窓の外の太陽は、既にその身を地平に落としている。西の空こそまだ若干明るいものの、もう数分すれば完全に暗くなるだろう。そんな中で、キツカは口を開く。

「そう……ですね。」

今日の事で、結構キてるようでしたし。そのフォローもしないまま帰る、と言つのも気が引けた、と言つ事もありましたし。何より……」

そこまで言つて、一呼吸置く。そして、マミの顔を見ながら、はっきりと言葉をつづけた。

「マミさんに、謝らなければならない事がありますから。」
「え……」

キツカの言葉に、思わず声が出る。それほどまでに、マミにとってはその言葉は意外な物だった。

そして、驚いた様子のマミをよそに口を開くと。

「これまで一人で戦わせることになって、すみませんでした。」

そんな、謝罪の言葉が飛び出て来た。

謝意を表す言葉を口にしたキツカが、驚いた様子のマミの顔を見る。少しの間、マミは呆けたように固まっていたが、数刻置いてから復帰すると、口を開いた。

「……一人でも戦う事を決めたのは、私よ。あなたが謝るような事じゃないわ。」

無理やり戦わされていた訳では無く、あくまで自分の意思で戦ったと言つマミ。先の言葉を自らに対するある種の侮辱と受け取ったの

か、その言葉には棘があるが、キツカの真意はそこでは無い。

「ええ、確かに戦うのを決めたのはマミさんです。ですが、それでも一緒に戦うと言う事をせず、一人にしたのは違いありませんよ。……どれだけ辛い事は、よくわかっていたはずなのに。」

そんな言葉を口にしながら、キツカはつくづく思う。何故、彼女の事に頭が回らなかったのだろうか、と。

少し、バマミの置かれている状況を整理してみよう。

彼女が魔法少女として活動を始めたのは、三年前の話だ。キツカの知る限り、彼女は二年前の一時期を除き、その三年間を一人で戦い続けてきた。

また、彼女の魔法少女としての活動時間帯は放課後から遅くて夜の10時頃までだ。はっきり言うが、そんな生活では他人とまともな交流を持っているとは思えない。その上、家族に関しては既に死別してしまっている。

想像してみても欲しい。他人との交流も無く、家族もいない。頼れるのは自分の力のみで、毎日命がけの戦いに身を投じる日々。その上、その戦いの結果が誰かに評価される事は無く、敵地で死ねば死んだことすら気づかれない……

そして、そんな環境がどれだけ彼女の心を圧迫して来たかなど、考えるまでも無い。正直な所、これまで彼女が精神疾患に罹患しなかった事が奇跡に思えてくるぐらいである。

「一人で戦う事が辛い事だなんて、分かり切っていたはずなのに。私はマミさんを一人にしたままでした。」

同じく「表に出ることの無い戦い」に身を投じるキツカには、それ

が容易に想像できた。また、共に戦う者さえいれば、孤独に苦しむことも無かったであろう事も分かっていた。

だがキツカはそれをしなかった。そんな辛い環境を強いてしまった。キツカに言わせれば、これは完璧に自らの落ち度と言う他に無かったのだ。

「そんな事に、今日の今日まで全く気付かなかった。……これが謝らずにいられますか。」

「……………」

キツカがそう言って口を閉じると、お互いを見つめあう。

少し離れた国道を走る車の音が、部屋に響く。お互いに、これ以上かける言葉が見つからないまま、また何か行動を起こすことも無いまま時間が過ぎていく。

と、その時だった。

部屋に電子音が鳴り響く。この部屋への新たな来訪者を知らせる音に、ママは今日幾度目かの驚いた様子を示していた。

「……………き、今日は、だれかお呼びで？」

「じ、じっしん。今日は、誰も呼んでないはずなのだけど。」

先ほどの発言のせいで、奇妙な空気になってしまったからか、二人の言葉は若干きこえない。

だが来客を待たせるわけにはいかない。ママは立ち上がると、玄関の方へ向かっていく。こんな時間に来る来訪者が気になり、キツカもその後ろからついていった。

ママが玄関の鍵を外し、ドアを開ける。するとそこには、帰ったは

ずのまどかとさやかが立っていた。

「じ、こんばんわ……」

「こんばんわ。」

「あなたたち……どうしてここに？」

時間帯的にも既に帰宅している物と思っていた二人の来訪に、マミは驚く。それに対し、まどかが口を開く。

「え、えっと……この前ケーキ出してもらって、ママさんケーキ好きなのかなーって思って……駅前においしい店があったから、いつしよに食べようかなー……なんて」

若干、答えになってないような気もしたが、まどかは笑いながら手にした白い箱を持ち上げて答える。その言葉にさやかが続く。

「今日、ママさんすごく辛そうだったから、見てられなくて……頼りないかもしれないですけど、私達でよければ頼ってください。」

そうさやかが、言い切った時だった。

ママミが、突然座り込んでしまった。

「ま、ママさん……」

「やっぱり、どこか怪我してたんじゃない……」

「違う……違うわ……そうじゃないの。」

突然の行動に仰天する二人に、ママミは声を返す。その涙でぬれた声には、さみしさや悲しみではなく喜びと感謝の色が含まれていた。

そして彼女はしばらく泣き続けた。目をはらし、次々とその滴を垂

らしながら。

ただただ「ありがとう」と、そう言い続けるのだった。